

右傾化妄想のスピリチュアリティ

——「精神世界関係者とキリスト教愛国主義派」を視座として

伊藤耕一郎¹⁾ 藤崎裕之²⁾

序 章

1 研究の背景

塚田穂高は、『右傾化』や『極右』や『右翼』など、遠い外国の話か、あるいは時折見かける街宣車の類に限られた話かと思っていたら、いつの間にかわれわれが暮らすいまの日本社会そのものをめぐって取り出さされる語となっていた」(塚田 2017: 1-2) という。確かにこの2、3年にかけて日本の右傾化についての話題がメディアや SNS をはじめとしたインターネット上で目立ってきたように筆者も感じてはいた。

そんな中、筆者は2023年9月19～22日にかけて、岐阜市で行われた日本福音同盟主催 (JEA) が主催する「第7回日本伝道会議」³⁾の中で「愛国が日本伝道の鍵! (9月21日開催分科会②)」というプログラムが行われるたことを知った。

このプログラムの案内トラクトには「日本民族性悪説と戦うことが日本宣教の鍵……」、「欧米キリスト教と日本の精神を見極める必要がある……」という見出しが付けられており、右傾化とは反対の立場にあると考えられてきたキリスト教⁴⁾においても同様の動きがあることをあらためて考える期会となった。

2 研究の目的

キリスト教、特に福音派の中に見られる右傾化傾向を持つグループ (以降「キリスト教愛国主義派」と記す) はその前から存在しており、先述の

会議は「指向性が似たグループが存在すること」がキリスト教のオフィシャルな会議において示されたにすぎない⁵⁾。

2023年4月に兵庫県で行われたキリスト教愛国主義派の会議では、これまで日本文化を無視した宣教が行われてきたことへの苦言、皇室を重視した宣教の必要性、また第二次世界大戦に対する日本基督教団「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」⁶⁾に代表される同大戦に対する歴史観の誤りについて活発な意見交換がなされていた⁷⁾。

これらの活動は、第3章に示した、それまでの行き過ぎたキリスト教会の自虐的史観やそれに基づく反戦活動を行うグループ（以下「キリスト教平和運動主義派」という）への反動やアンチテーゼと解すれば、一概に否定されるべきものではないだろう。

本研究において筆者が問題にしているのは、彼らが発信している情報がここ数年の間に一部の精神世界関係者から発信されている情報と酷似している点である⁸⁾。

「戦没者慰霊」や「神道の尊重」、「皇室への敬意」など、表現こそ多少の違いはあれ、その発信される内容は、(伊藤 2021b) で示した2020年の米国大統領選挙におけるシンクロ現象を彷彿とさせるものである。

先にも記したが、右派的情報を発信する精神世界関係者は一部であり、今でも大半の精神世界関係者はニューエイジやその周辺（島蘭進 2007：23-42）を引き継いでいる。またキリスト教愛国主義派もキリスト教の中では極めてマイノリティな存在である。しかし、ごく少数派とはいえ精神世界と福音派という「本来は相反するはずの両者から発信される情報がシンクロしたかのように見えること」を筆者が取り上げるのはこの3年弱という短い期間で2回目となる。

清義明は(伊藤 2021b) について、「そもそもニューエイジ運動はアメリカでは体制化したキリスト教へのアンチとして出てきた意味合いが大きい」にもかかわらず、両者がもともと持っていた「古層のアーキテクトが磁力のように陰謀論を引き寄せて」しまった結果、「たやすく共鳴して

しま」い、「ニューエイジ的価値観と福音派キリスト教のミクスチャーにもなる」(清 2023: 193) と分析する。

本論文は「なぜ両者が右派的な情報を発信するに至ったのか」について検証を行い、この社会現象と右傾化する人々のスピリチュアリティについて考察を行ったものである。

3 本論文の構成

第1章では「現代社会が右傾化している」という言説についての真偽を明らかにし、本研究において右派的信息を発信する精神世界関係者とキリスト教愛国主義派をとりあげる背景を確認する。

第2章では、精神世界関係者から発信される右派的な情報から、彼らの全体像について文献・ドキュメント・資料⁹⁾を示し、現地調査・聞き取り結果から、そのような情報が発信される背景についての検証を行う。

第3章では歴史修正主義や天皇畏敬を掲げる「キリスト教愛国主義派」と、左翼的運動的に見られる「キリスト教平和運動主義派」との比較及び検討を行い、それぞれの台頭背景について検証する。

第4章では第2章、第3章でとりあげた精神世界関係者とキリスト教愛国主義派とが具体的にどのような活動をしているのかについて、現地調査及び聞き取りから、その類似点と相違点について比較検討を行い、両者のシンクロ現象についての分析を行う。

終章ではこれらの検証を踏まえた上で、今後も両者は同じ方向へ進むのか、この現象は現代社会におけるスピリチュアリティの現れの1つといえるのかどうかについて考察する。

4 研究手法

本研究では現代の社会情勢下における、「精神世界」、「キリスト教」というそれぞれの全体像の中から、「右派的信息を発信する精神世界関係者」、「キリスト教愛国主義派」という個々を研究対象にしている。

全体像については、質的研究と量的研究で得られる結果が違うことがあ

るため、双方から研究を進めていく。

また、個別の対象についてはより深く掘り下げた調査結果を必要とするため文献・内部ドキュメントに合わせて聞き取りや現地調査結果を用いた質的調査を行った。

なお、個々の対象への質的研究の妥当性については、できる限り先行研究文献にもあたり、これを担保するように努めた。

第1章 日本は本当に右傾化したのか

本研究を進めるにあたり、「日本は本当に右傾化したのか」ということについて論ずる必要がある。

1・1 社会は右傾化しているのか

古谷経衡¹⁰⁾は、2011年当時、右翼団体と密接な関係にある放送事業者「ちゃんねる桜」での「レギュラーメンバーの1人になっていた」（古谷 2023：43、46-47）経験から、「永らく右翼業界に居を構えてきた経験上、彼らの中に若年層をほとんど見ることは無かった」（古谷 2023：11）という。また、「ゆうに3桁はあるであろう」とする右翼集会やイベントに参加する（古谷 2023：45）などの参与調査などを通して、「日本の右傾化の主役は明らかに50歳以上のシニア層」であり、若者右傾化論は「ミスリードであり、間違った分析である」（古谷 2023：11-13）としている。

古谷は、ブロードバンドの普及により動画サイトの閲覧が容易になったことがシニアの右傾化に関連性に大きく関連しているとし（古谷 2023：138-149）、それは日本だけではなくアメリカにおける「トランプ前大統領の熱心な支持者である『Q アノン』』について、これを「ネットの陰謀論者（中略）や右翼だった」と同様にみなしている。

ブロードバンドの普及と動画サイトによる情報に加えて古谷は、「大メディアはある時期までは確実に『権力監視』という使命感があった」が、

戦争体験者の減少によりその「批判精神が時代を経て摩耗した」とし（古谷 2023：227-229）、「戦争経験者が途絶えたのちの世代にあっては『なぜ』の部分欠落し」、検証がなされていない歴史修正主義を鵜呑みにする人が「トンデモ理屈にとびついてしまう」（古谷 234-235）としている。

言い方を変えればブロードバンドの普及と YouTube などの動画サイトが（古谷の定義する）シニア層を右派陰謀論者的な性格に変えていったということになる。

また、大澤真幸¹¹⁾は「現代日本の社会意識は保守化・右傾化している、と言われている」、「右／左／、保守／革新についての伝統的基準を用いて判定すれば、保守化・右傾化ととらえるほかないような現象が、現代日本社会には見られるのである」とし、この問題は長期的には「1990年代初頭の『歴史教科書書き換え』の運動あたりから始まっているとみなすことができる」とし、もう少し短いスパンで見れば「ジェンダーフリー・バッシングや、ネット上での左翼バッシングが顕著になってきた2000年代に、事態は加速してきたと記すこともできる」（大澤 2011：172）という。

しかし、いわゆる「パートナーシップ制度」が2015年11月に東京都渋谷区と世田谷区で始めて以来、同様の政策は2023年4月現在278の自治体で採用されており¹²⁾、2023年6月には「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」の公布・同日施行がなされるなど、政策はジェンダーフリー・バッシングとは逆の方向へ進んでいる。

松谷満は国際比較調査（ISSP）や「日本人の意識調査」（NHK）、「日本人の国民性」調査（統計数理研究所）のデータ分析から、男女の性役割を設けることに肯定的な回答が減少していることや、結婚や子供を持つことが当た前だと考える人が減ってきていること、同性愛への肯定的な回答の大幅増加などから、「ほとんどの側面で、個人の自由な選択を尊重する方向へと世論が変化してきている」と報告しており、「反-個人主義としての『右傾化』は今のところ生じていない」（松谷 2020：37-45）としている。

これを受けて小熊英二は、「総じていえば、社会全体の右傾化はさほどみられないにもかかわらず、自民党が選挙に勝ち続けており、その影響がメディアや右派団体に及んで」おり、結果として「実態以上に右傾化の印象を作り出している」（小熊 2020：12）として、「これは『右傾化』というよりは『左の衰退』というべき状態かもしれない」（小熊 2020：7）という。

これらから考えると、日本は右傾化しているという前提で論ずることは難しいということになる。

とはいうものの、報道レベルでは右傾化が指摘されることが多く、政治家などの右派言動が目立っていることも確かである（小熊 2022：1）。小熊は「社会を観測する側の視点の偏り」から「社会全体の意識調査では顕著な右傾化が観測されないとしても、『右傾化』が顕在化する要因はいろいろありうる」（小熊 2022：4）とする。

つまり、これまで見ていなかった右傾化した部分の顕在化が進んだのがこの2、3年であり、2022年の参議院通常選挙結果¹³⁾はその現れの1つだということができよう。

1・2 何が右傾化したのか

上記から、「日本社会の右傾化」といっても、社会全体が右傾化したのではなく右傾化した分野が目立ってきているのが「現代日本社会の右傾化」の実態であるということができよう。

ゆえに本研究では、その対象はおのずと日本社会全体ではなく、社会のある部分を切り取って研究を進めていくことになる。

本項は先行研究から右傾化が進んでいる分野を明確化し、またドキュメント等でこれらを補完することにする。

小熊は、「社会が総体として大きく変化していなくても、社会の上層部に『右傾化』が生じる可能性とその影響」を問題視し、「異なるレベルを統一して『右傾化』を論じ」ることを試み（小熊 2020：4-6）、これを

「意識レベル」、「メディア・組織・思想レベル」、「政治レベル」の3つに分けて分析している。

(1) 意識レベル

松谷は、意識レベルにおいては（民俗的）「優越主義」と、中国・朝鮮民族に対する「排外主義」の部分が右傾化を示しているとする（松谷 2020：49-66）。

早川タダリはこの（民俗的）優越感について、「日本スゴイ」系テレビ番組を例にあげ、「スゴイのは技術を開発した人や企業のはずだが、いつのまにか『日本人っぽい』、『誇りに思える』といった、日本人の優秀性を強調するものへと巧みに接続されている」という。

また早川はテレビだけでなく、「日本スゴイ」系出版物には外国人旅行者が驚嘆した日本の「スゴイ」が様々紹介されているが、「海外からのコメントに出典が記されていないので、ソースを確認できない面妖さ」が共通していること、すべてテーマが「『なぜ日本は世界中から愛されているのか』で一貫している」としている（早川 2020：239-241）¹⁴。

もう1つ確認できるのが、韓国人や中国人に対する「排外意識」の強まりである（松谷 2020：52、63）¹⁵。

松谷は各種の調査結果を検証して「外国人一般についての寛容さが増している」、「定住目的で日本に来る外国人への態度は以前と比べてむしろ慣用になっている」としており（松谷 2020：52）、排外主義全体に関しての右傾化の傾向はみられずむしろ「世論の寛容さ」や排外主義について世論は無関心だとする（松谷 2020：55）。

これに対して百田尚樹¹⁶は、神戸朝鮮学校の生徒が修学旅行先の北朝鮮からの土産を没収された件について¹⁷、日本政府に対して「環境的には日本人の高校生となんら変わらない」と抗議を行った朝鮮総連側について、そのように「いうのなら、日本人を拉致した国に怒りを持って欲し

い]、「北朝鮮への修学旅行なんて、学校行事にかこつけた鬼畜の国への里帰りにほか」ならない、「そんな人たちには再び日本の土は踏んでもらいたくないのが正直な気持ち」だと綴っている（百田 2019：50-51）。

また百田は、2016年12月に大雪のために新千歳空港発の飛行機が欠航したことに対して中国人観光客が怒ってゲートを乗り越えた事件を取り上げ、中国人観光客から逮捕者が出なかったことについて、「言ってもわからない相手には力で制圧するしかない」、「丸腰の百人すら制圧できない国」と日本政府に苦言を呈している（百田 2019：202-204）。

その他、事例をあげれば枚挙に暇がないが、中国・朝鮮民俗に対する右傾化した排外主義的な論調（以下単に「排外主義」と記した場合はその対象は中国・朝鮮民俗に対するものを指し、他外国について述べる場合はその旨を記載する）が強まっていることは確かである。

(2) メディア・組織・思想レベル

1. メディア

「メディア・組織・思想レベル」について、林香里・田中瑛は「日本のメディアは総体として右傾化している。これが本論の結論である」とする（林・田中 2020：147）。

西村幸裕¹⁸⁾は、「NHK 設立の裏に隠された闇」として、その設立はWGIP¹⁹⁾による日本洗脳計画の一環であったとし、NHK がみずから公表している歴史の中に1945年8月の〈終戦の勅令を録音放送〉から1950年6月のNHKの設立までが欠落しており、その部分が「戦後日本の『隠された言語空間』の核心」であり、「フェイク・メディアの活動根拠」となったとしている（西村 2017：116-119）。

また西村は現在の日本メディアについて、「結論から先にいえば、日本国憲法の前文と第9条のせいで、まともな軍事・安全保障の報道ができる能力が、あらかじめ削除されている」という。

本研究はその原因にまで言及するものではないが、林・田中は「これ以上拡大しない市場を前に、記者たちは長期保守政権によって分断され、政

治報道のウェイトは『右』に移っている」とその一因に政治があることを示唆している（林・田中 2020：139）。

また先述したが古谷は、参与観察研究から YouTube 動画によって右傾化するシニア世代がいることを示しており、メディアは総じて右傾化しているといえるだろう。

2. 組織

ここでいう組織は、政府の行政機関や自治体ではなく、樋口直人が「草の根組織」と呼んでいるものを指している。草の根組織とは、政党、政治団体、思想団体、市民運動からネット上の運動など、団体に限らず幅広い対象を指しており、「在日特権を許さない市民の会（在特会）」、「日本会議」や「神道政治連盟」などもこれに含まれる（樋口 2020：191、194-195）。

樋口直人は、市民運動に端を発する「草の根組織」の中でも「特有的イデオロギーに関して、主流派保守よりも右よりの主張・行動をする組織」を「草の根極右」と定義し、これを「街宣右翼」、「右派ロビー」²⁰⁾、「排外主義運動」の3つに分類しその勢力や影響力について、各種アンケート調査結果から分析している。

樋口は、街宣右翼は勢力・影響力ともに衰退しているものの（樋口 2020：202、204）、インターネットを基盤とする排外主義運動は拡大傾向にあり、規模は小さいものの「既存の草の根極右が取り込めなかった社会的基盤」を持つに至っているという（樋口 2020：214）。

また右派ロビーも単独では衰退傾向にあったものの、保守政治の歴史修正主義と関連し、そのパートナーとして組織側・政治側の双方が価値を見いだした結果、「急速に主流化」したとされており²¹⁾、「政治主導による草の根組織の右傾化は確か」に起きているとしている（樋口 2020：208-214）。

3. 思想

島藺進は、冷戦終結後に世界各地で「宗教」や「文明」、「民族」、「人種」の帰属意識が高まっていった変化について、日本においては「戦前の国家神道や神権国体論に郷愁を抱き、明治維新から15年戦争に至る過程を肯定的に捉える」傾向が現出し、安倍政権下でさらに拡大したという（島藺 2020：223-224）。

具体的に島藺は、1895年からカウントしている伊勢神宮の参拝者数が、2019年には過去6番目に多かったこと、また2012年に成立した安倍内閣の19人の閣僚のうち13人が日本会議に所属していたことを指摘している（島藺：2020：224-225）。その上で島藺は、「それらはいずれも神聖天皇崇敬や国家神道の復権・復興に関わる動きである」という（島藺 2020：256）。

この伊勢神宮の参拝者数と日本会議の躍進への言及は2つの点で本研究と関連してくる。1つは伊勢神宮がパワースポットである点、2つめは日本会議の設立20周年に「第7回 日本伝道会議分科会」で講演を担当した西岡力²²⁾が、「日本会議とともに戦ってきた拉致救出運動」としてコメントをよせている点である²³⁾。

さらに島藺は、「伊勢神宮参拝の興隆と国家神道の復興とがまったく無関係ともいえないだろう」としつつも、「急増している伊勢神宮参拝者がどれほどの政治意識をもっているかは不明」、「神社参拝の増加は『パワースポット』ブームと関係がある」という。

確かに筆者の周囲の精神世界関係者も、筆者が調査を始めた頃と比べて伊勢神宮を重視する者が多くなったように感じる。

日本会議は「神社本庁」を中心とし、新宗教からも代表委員が多く選出されていることから（塚田 2017：365）、宗教との関係が小さいとはいえない。

しかし、「国旗国歌法」への反対声明をはじめ、左派が主流とみられる

プロテスタント諸教派及びカトリックは当然これには属しておらず、西岡が軸足としているキリスト教愛国主義派及びその母体となる福音派も同様である。まして、宗教団体とはいえない精神世界関係者との直接的な関係はない。

しかし、パワースポットと西岡の論稿について見ていくと、思想において「キリスト教愛国主義派と精神世界関係者とから右派的情報が発信されることは無関係」とは言い切れないのである。

(3) 政治レベル

政治に関しては、これまでの記述からすでに「右傾化してきている」ことが読み取れるであろう。阿部内閣で舵取られた2014年の集団的自衛権の限定行使の閣議決定や憲法改正や防衛力強化という方針は、「近年の自民党を特徴づけるのが、右傾化である」（中北・大和田 2020：264）という言葉に表れている。

また、何度厳しい批判が起きても、極右的地方議員による排外主義的発言は繰り返されており（砂原 泰 西村 2020：295）、政治レベルにおいて右傾化が進んでいることに疑いの余地はない。

さらに、政治面における右傾化は本研究と深い関連がある。2022年の参議院選挙で「ほぼ無名の状態から、（中略）比例票を獲得して国政政党になった参政党」（雨宮 2023：109）の台頭である。参政党は「右派政党4党」として紹介されており（蔵持 2022：18/288）、歴史修正主義に立つ右派政党であるが（神谷 吉野 2022：96-98）、同時にコロナ・パンデミック時に幹部が「ワクチン接種やマスクを着用していてもコロナに感染する」、「コロナは風邪と同じ」（蔵持 2022：101/288）と精神世界関係者と同様の主張（伊藤 宇山 濱田 2023：43-46）をしており、同党を代表する一人である赤尾由美が並木良和²⁴⁾と対談するなど、政党の中では「スピリチュアル色が特に濃い」とされている（雨宮 2023：110）。

1・3 小括

日本の右傾化は社会全体ではなく、(民俗的)「優越意識」、(ネットを含む)「メディア」、(右派ロビーや排外主義を中心とした)「組織」、(天皇崇敬や国家神道、神社に関する)「思想」、「政治」の分野できわだっており、宗教、精神世界の一部がこれに関係している。

これらを踏まえて考えると、右派的情報を発信する精神世界関係者やキリスト教愛国主義派が表に出てきたことは時流の上であり、「両者を研究対象にすることの意味」をここに見いだすことができる。

これら第1章の社会背景を踏まえた上で次章からは、具体的に右派的情報を発信する精神世界関係者及びキリスト教愛国主義派の興隆とその理由についての検証を行っていく。

第2章 精神世界関係者からの右派的情報発信

本章では精神世界関係者からどのような右派的情報が発信されているのかを確認し、彼らの主張の背景にあるものについて検証する。

2・1 発信されている情報

(1) ネット上のもの

精神世界から発信される右派的な情報はネット上に多く見られる。彼らがつくっている SNS グループ²⁵⁾の書き込み内容を見ると、「最早在日韓国北朝鮮人がスリーパー・セル²⁶⁾潜伏工作員と言わざるを得ない²⁷⁾」、「憎しみや憎悪、対立、争い、令和の時代ですから、天皇の勅命を大切に受け止めましょう。日本人にしかできません²⁸⁾」、「古代日本民族は世界へ渡り様々な活動をしてきたことが少しずつ明らかになっていくと思います²⁹⁾」、「戦没者に畏敬の念を示し、英霊らを弔うことにしかこの国の活路はない³⁰⁾」、「二元論もまた、思考停止の洗脳です。本当の日本人は二元論でモノを捉えたり考えたりしません。西洋の思想です³¹⁾」、「フォロワー数1600万人の人気司会者が日本文化の価値を今後の講演会で盛り込むと公言。日

本人こそ日本文化と霊的浄化について本当は知るべき」³²⁾など、彼らが言及する分野は1・3にあげた右傾化が見られる分野と一致している。とはいえこの SNS グループは「右派的思想を持つ人々」が集まっているためこの結果は当然ということもできる。

そこで、公開されている精神世界関連の WEB ページからも同様の情報が発信されているかの確認を行ったところ次のような記事を見つけることができた。

「中国人と韓国人の霊格が低い！スピリチュアル（原文ママ）この話は、他国を見下す意味での話ではなく『スピリチュアル』から見る、必然的な話としての話です（原文ママ）」³³⁾、「私がこのご先祖様をしっかりと供養しないといけないと、心に誓いました。そして私達は沢山の英霊がいて、今がある事を忘れてはいけません」³⁴⁾、（日本の古い文化について）「『このような世界は、説明して分かってもらえるものではない、自分の霊能が開花し、霊能力で自然と分かってもらえるもの。“神道は言挙げせず”』とされています」³⁵⁾、「新天皇のサインは、私たちが自分自身や世界とのつながりを深め、喜びや幸せを追求することの重要性を思い起こさせてくれます。新天皇の存在には、深いスピリチュアルな意味とメッセージが込められています。私たちは、その意味を理解し、彼の存在から学び、成長することができます」³⁶⁾、「ウォーキングで良く行く神社の横に戦争の慰霊碑があります。私は必ずこの慰霊碑の前で手を合わせ戦死者を弔い、日本を守ってくれたことに感謝する『有難う』を伝えた後、隣の神社へお参りして、私に関わる全ての人の幸せ、そして、日々の感謝を祈るのがウォーキング中の趣味なんです」、「じゃあ、全部の戦場で負けてたのか、というところとちょっと違います。（中略）負けに学ぶのは大切なことですが、勝ち戦があったこともきちんと知っておくべきであると思います」³⁷⁾、とこれらの記事も3・1の分野に該当している。

このように WEB ページからも精神世界関係者の右傾化を確認することはでき、その言説は序章及び第3章で示したキリスト教愛国主義派と重

なっている³⁸⁾。

(2) 文献・ドキュメントから

精神世界関係のドキュメントを見てみると、「現在の複雑な国際情勢、地球事情ですが、(中略)その統治の中心が『天皇』であり、その純血統の力は世界の人々にとっても納得できるものです」(西村 2014: 206/216)、「世界中でもっとも古い国といえば、それは日本です。(中略)日本という国は天皇を中心として、二千年以上の歴史を持つ国なのです」(デラヴィ 2014: 159)、「古代では特に、神と同等な天皇が現人神として身近にいるという状況を作っておくことが、人間社会を安寧に平和裡に営んでいくうえで、とても大事なことだった」(保江 2019: 67)といった日本民族の歴史や民族的優越意識や天皇(皇族)崇敬思想が散見される。

江原啓之は戦没者慰霊について、「靖国神社に関する問題について、スピリチュアルに見た場合にどのような解釈ができるか」として、「スピリチュアル的な考えに立てば、(中略)戦争で亡くなった方のたましいと交流、面会する場所」、「その観点に立てば、実はお墓と一緒」であり「たましいと交信するためのアンテナの役割を果たすもの」(江原 2007: 53-58)としており、三日月はづきは、「ご先祖との距離が近ければ近いほどに、スピリチュアルメッセージの受信率がたかまります」として、“スピリチュアル的潜在能力の開花”に関する先祖供養の重要性について述べている(三日月 2022: 13-15)。

(3) 現地調査及び聞き取りから

筆者が行った、聞き取りにおいても同様の発言を耳にすることがあった。(コロナ・ウイルスについて)「モンゴロイドの血が強ければ(コロナ・ウイルスに)感染しても発祥しないのでマスクの着用は不要」、「コロナはとある民族を滅ぼすためのウイルスだった」(伊藤 宇山 濱田 2023: 36)など明かに排外主義的な発言や、「北海道では目覚めた人が増えてきている」(伊藤 宇山 濱田 2023: 37)などの優越主義、「本来神社からエネル

ギーを得ているはずの日本人が弱体化しているのは、神社に降り注ぐエネルギーが吸収できないためで、これはアメリカが神社本庁をつくったときに仕組んだ」（伊藤 2022：316）など、神社信仰の大切さと、日本人に力を与えている神社信仰が占領軍の洗脳道具にされてしまったという言説も目立っていた。

コロナ・パンデミックの初期には「令和になって天皇陛下や皇族に対する敬意が薄れたために『天皇霊』の力が弱まり、本来の日本人の持っている霊的安定が保てなくなっている」³⁹⁾、「日本を守ろうとしていた英霊たちの存在を覚えている人達が少なくなってきたことは、日本が世界から軽んじられる霊的原因を作っている」⁴⁰⁾、「日本の正しい歴史を学び直し、日本人が自分たちのためではなく周辺国の解放のために戦ったという歴史認識に立ち直らないと日本は本来の霊力を取り戻せない」⁴¹⁾という戦没者慰霊や歴史認識の修正を訴える声も聞かれた。

「神戸護国神社マルシェ」では2年にわたり、正式参拝が行われ（写真1）「今の日本を支えてくれた英霊たちを思い出すこと」の必要性が説かれていた（2022年3月25日 現地調査、2023年10月15日 現地調査）。

大杉神社を守る会（伊藤 2022：263）の世話人（50代男性）は、2021年から金星のエネルギーを集めるために倉庫を改造し、2023年に筆者が現地調査へ行った際には3階建ての神域を含む木造建築物を完成させており⁴²⁾、中では「日本人にしかできない」エネルギーを込めた木工細工や（写真3）、「外国からのエネルギーが加わらない純粋な日本人のエネルギーを込めた食品や物品」の必要性から「日本ミツバチの密から生成した蜂蜜」をつくっていた（写真2）。

また、同年11月にはその一つの成果として「空間エネルギー研究の一環」として関連団体による独自パーツによる車のチューニングが行われ、（日本人の手による）「純粋なエネルギーの工業的利用」についての実験も行われていた⁴³⁾。



(写真1 主催者より提供)



(写真2 筆者が撮影)



(写真3 筆者が撮影)

2・2 情報発信の背景

前項(1)～(3)から分かるように、精神世界の一部から発信されている右派的な情報の内容は、日本社会において右傾化している部分と重なっており、かつキリスト教愛国主義派が発信している情報と重なるものが多い。

筆者は、この背景について、文献・ドキュメント及び現地調査・聞き取りから、精神世界内でここ数年起きてきた「古神道ブーム」とそれと密接に関係する「前期霊性思想」⁴⁴⁾が影響を与えているのではないかと推測している。

(1) 古神道と右派的情報

現在「聖地」と呼ばれる場所の大半は、神社に集中しており（堀江 2019：177）、古神道的な思想をもって神社を訪れる精神世界関係者は2009年～2010年を境に増えている（伊藤 2022：199）。

彼らは、「神社本庁所属の神社」だけを訪れるのではなく、地域にある（神社本庁に属していない）神社、ご神木、磐座も聖域・聖地として大切にしている。

2023年以降の筆者の調査では、地域の神社を聖地として清掃や保守を行う「霊性にかんする協働組織」⁴⁵⁾の増加が確認され⁴⁶⁾、日本神話の神とつながるための集まりが開催されるなど⁴⁷⁾、古神道と接点を持つ精神世界関係者が増えてきているように感じられた。

ところが、精神世界関係者のいう天皇（皇室）への崇敬や神道復興への期待と、鳥蘭のいう「神聖天皇崇敬や国家神道の復権・復興に関わる動き」（第1章参照）とは正確に見ていくと違うものであることが分かる。

第1章でいう「歪められた神道」とは、神社本庁が宗教法人格を得るため GHQ が皇室と伊勢神宮との関係を切ってしまったことを指している（鳥蘭 2017：314-317）。

一方、古神道系の精神世界関係者が「GHQ によって歪められた」とするのは、「宇宙の存在の声を畏怖畏敬の念を以て聞き取ろうとする根本的

な態度」と、その目的である根源的な力に帰依し一体化すること（鎌田 2003：32-33）を指している。

表面上に出てくる「神道は GHQ によって歪められた」という言葉は同じでも、両者が指しているものは乖離しているのである。

確かに、筆者が参加した古神道系の勉強会⁴⁸⁾では「日本人は古代から天皇家を通して、神々との繋がりがあからこそ霊格を高く保つてくることができたのにもかかわらず、間違った歴史教育によって歪められた」という民族的優越主義的発言や、歴史修正主義的発言はあった⁴⁹⁾。

しかし、第1章で示した右傾化した人々は「神聖天皇」による「国民の一致」を神道の祭祀に求め（島藪 2020：223-225）、古神道系の精神世界関係者は「宇宙意識と繋がりが一致していく役割」を神道の祭祀に求めている点で両者根底にある思想は別物なのである。

(2) 前期靈性思想における神道・天皇（皇室）観

筆者は、前期靈性思想を精神世界成立前の戦前の靈性思想で、その中心はスピリチュアリズムや靈術（民間精神療法）だったとしている（伊藤 2022：31）。純粹なスピリチュアリズムの系譜にある組織・団体は精神世界と距離を置いてはいるが（伊藤 2022：157-159）、現在の精神世界にはスピリチュアリズムにつながる心靈術や神伝靈学の技法も取り入れられるようになってきている（伊藤 2022：31）。

そして、戦争前の社会を考えると、前期靈性思想の中に右派的思想が精神世界の中に入ってきたことに何ら不思議はない。

松本道別⁵⁰⁾は主著『靈学講座』（原版 昭和2~3年）の中で「政府者の最も憂慮する所のものは赤化思想である。赤化思想の恐るべきはペスト虎菌よりも甚だしく（以下略）」⁵¹⁾、「彼等は我国体の本義に反し皇室の尊嚴を冒瀆せむとする者」と、帰神交霊⁵²⁾を行うにあたり、左派的思想を退け皇室の尊嚴の重んじることの必要性を説いている。また松本はその方法として「赤化思想を防止せむが為には歴代の政府者皆悉く敬神を鼓吹し神社

参拝を奨励する」と神社参拝を勧めている（松本 1991：509）。

松原咬月⁵³⁾は、「神伝靈学の本領は神道の修理固成弥栄であり、人道に於ける共存共栄⁵⁴⁾と心靈術の基礎は神道にあるとし、「宗教と神社とは混合的状态である為め真に迷妄の暗を破する困難を生じて来まして、神社に対する信仰も遂には一部の人には迷信視せらるるに至り（後略）」（松原 2002a：61）と神社に対する純粹な信仰が無くなったことが靈的盲目を招いたとしている。

また、松原は神社に祀られる神について、一般的には八百万の神とされているが「燃し之を概括する時は數、音、言の三靈夫れのごとく三種となって産土神、氏神、偉人奉祀というに判る⁵⁵⁾」（松原 2002a：63）と神を分類した上で、神には階級があり「神靈学上源を総統し給う大神靈を天御中主大神と呼びます。（中略）宇宙は其御神体」であるといい、その他の神について「諸神は、大神から分許せられた靈能各自備わり、分掌制度を以て宇宙の進化向上に参与」するとしている（松原 2002b）。

さらに浅野和三郎⁵⁶⁾は、日本の神社について「我々心靈学徒の立場からすれば、（中略）之を要するに日本の神社は、すべてを意念のエーテル波動と解し、その見地から考察を加えた時に、初めてその有り難さが判ります」（浅野 1938：4）とスピリチュアリズムにとっての神社の重要性を具体的に説明している。

前期靈性思想の中心は先に述べた通りスピリチュアリズムであるが、これは「和製スピリチュアリズム」ともいえるもので（伊藤 2022：23）、靈術家や心靈研究者はその力の源泉を神社信仰や皇族への敬意に求めていたことは、上記の文献・ドキュメントからも明らかである。

しかし、彼らの論述からも分かるように、前期靈性思想において彼らが指す神道は第1章に示された右傾化した分野の人々がいう神道とは別物であり、ここ数年の古神道ブームにおいて語られる神道信仰にかなり近い。

ここから、2009年～2010年頃からおこってきた古神道ブームを、精神世界の中でくすぶっていた前期靈性思想が復興してきた理由とする見方もで

きるが、この部分については本研究の意図から離れてしまうため今後の課題とし、ここでは現在の精神世界の中で育ってきた前期霊性思想が右派的情報が発信される一端となっているのではないかと推測にとどめておく。

2・3 小括

古神道系の「精神世界」から発信されている情報の中には右派的なものが見られ、そこに（民族的）「優越主義」や「天皇（皇族）崇敬」、「神社祭祀の重視」などが見られることは先に示した通りである。

しかし、これらの思想は新しいものではない。筆者はこれを、古神道ブームの中でスピリチュアリティを追求していった結果として前期霊性思想と同じ思想にたどりついた結果に過ぎないと考える。

また、浅野が「我々心霊学徒の立場からすれば、かの仏教の寺院、キリスト教の教会なども、決して捨てたものではないようですが、ただいかにも、少々無用の装飾、または不純性の来雑物があって、信仰教育機関としての効果がよほど殺がれているように思われます」（浅野 1938：4）としているように、前期霊性思想における排外対象は中国・朝鮮民族ではなく欧米に向けてのものであるように思われる⁵⁷⁾。

天皇（皇族）についても（松本 1991）や（保江 2019）、筆者の現地調査・聞き取り結果から分析する限り、天皇（皇族）を日本の「霊的指導者」、「霊的守護者」として精神世界の霊性進化論の文脈で見えており⁵⁸⁾、天皇（皇族）を中心とした国民の一致・国体維持を目的とした「現在の右傾化した分野でいう天皇（皇族）崇敬」とは違うものであることは明白である。

つまり、「第1章であげた社会的な分野から発信されている右派的情報」と「一部の精神世界から発信されている右派的情報」は本来その背景は別ものであるが、「結果として表面上に現れる情報が同じように見えるにすぎない」ということになる。

であれば、「キリスト教愛国主義派が発信する情報」と、「右派的な精神世界関係者から発信されている情報」についても両者がシンクロしている

ように見えても、その背景にあるものが違っている可能性は否定できない。

次章ではその前段階として、キリスト教愛国主義が発信している右派的情報と、その対局にあるキリスト教平和主義運動派とを比較しその実態を明らかにする。

第3章 キリスト教愛国主義派の宣教論と戦後キリスト教平和運動の相克

3・1 問題の所在

現在のキリスト教・プロテスタント教会において、愛国主義的な視点に立って宣教を確立しようとしているいくつかのグループがあることは先に示したとおりである。具体的グループをあげれば、「日本を愛するキリスト者の会」⁵⁹⁾、「ソルティー日本キリスト教オピニオンサイト」⁶⁰⁾などが講演活動やネット配信などによって自説を展開している。

彼らの共通点はキリスト教平和運動主義派が、「日本の歴史を否定的に捉え、反天皇制、反靖国運動」を教会に持ち込み「信徒を惑わせている」として、キリスト教平和運動主義派を批難しているところにある。

彼らがあげる批難の対象となるキリスト教派の代表的なものとしては、「日本基督教団」、「日本基督教会」、「日本改革派教会」などが想定されており、キリスト教愛国主義派は彼らを「左翼」と呼んで激しい批判を繰り返しているように見える。

残念ながら筆者の知る限り、「キリスト教愛国主義派」と「キリスト教平和運動主義派」が直接に対話をするという機会はこれまでもたれていない。そこで、本章では両者の主張を平行的に記述し、その主張について各々検討していく。

3・2 キリスト教愛国主義派の宣教論

(1) 宣教会議

2023年4月に兵庫県でキリスト教愛国主義者による「宣教会議」が行わ

れた。その会議において、彼らのリーダー的な存在である後藤牧人牧師によって発題がなされた記録がある。

後藤は2011年に『日本宣教論』（2011年 イーブレーブ）を刊行しており今回の発題は、同書籍の続編として書かれた次回著作のたたき台となる長大な資料をもとに行われた⁶¹⁾。そこからいくつかの文章を書き出してみる（以下すべて原文ママ）。

1. 日本宣教を考えると、日米戦争を避けて通ることはできない。戦後には日本は世界征服を企て、侵略戦争を始めた犯罪国家であると断罪され、学校教育はその戦で組み立てられ、日本のキリスト教会もその線の思考で宣教して来た（後藤資料 2023：3/6）⁶²⁾。
2. 現代の日本社会では、あれは「もう済んだこと」とされて、日本は平和国家になったのだという意識があり、国際的な立場も確立されている（後藤資料 2023：3/6）。
3. しかし、日本のキリスト教会は「すんだこと」としたりする態度は不真実であり、戦争告白というかたちで、日本という国家の罪責を忘れず、責任を感じ続けるべきであるとしている（後藤資料 2023：3/6）。
4. 日本のキリスト教会の一部において信仰者の「悔い改め」の中に戦争責任を認識するように求められ、ことあるごとに日本に敵対する。その敵対的見解を日本の教会は受け入れ、その結果として教会が信徒に対して、日本人であること自体を恥じるように指導し、日本人であること自体に罪責感を持つように求めているように見えることがある（後藤資料 2023：3/6）。
5. 果たして戦争責任の強調は必然的な告白なのか。それとも、日本的な体質を忌み嫌う「革新的」また「進歩的」な一握りの人た

ちに振り回されているのではないかという疑問がある（後藤資料 2023：3/6-4/6）。

6. 日本のキリスト教会は絶滅危惧種の様相を呈している。若者は集まらない、出席者は減っている。なぜそうなのか、そこを探りたい（後藤資料 2023：4/6）。

以上が、後藤が宣教を語る際の前提となっていると考えられる。注目すべき点は戦争責任を問う側のキリスト教、すなわち「キリスト教平和運動主義派」もその対極にある「キリスト教愛国主義派」も日本が行った戦争について明確な答えを持っているということである。

両者の主張の相違は戦争に対する歴史解釈の違いによるものである。その点については後ほど記すことにし、まずは後藤による日本宣教論の組み立てを見ていくことにする。

(2) 後藤による日本宣教論の組み立て

資料「第一部」では、主に白人優越のキリスト教文化論を展開し、白人優越のキリスト教は、アリストテレスの奴隷論の延長線上にあるとされている（後藤資料 2023：2/17）。

後藤はアメリカキリスト教文化を批判するために、17世紀の移住者時代からすでに黒人奴隷制度が導入されており、その悪影響がアメリカの黒人社会に影響を与えているとする（後藤資料 2023 人種差別の世界：5/17）⁶³⁾。

後藤のアメリカ文化論にはかなり極端な面があり、「アメリカの成人男子の半分以上が事実上の文盲であると言われる」がゆえに家具の組み立て説明書が理解できないという記述も見られる（後藤資料 2023：5/17）。

後藤の資料には出典の記述がないので、どのような根拠でこのような記述がなされたのか、この内容が事実であるのかは不明であり、それは原著である『日本宣教論』（2011年）においても同様であった。

これらの宣教論の土台には「日本人の優秀性（民族的優越）」があるよ

うに見受けられる。

これについて、アメリカに渡った日本人に対する評価を書いている部分から紹介する。

同資料には、日本人は中国人とは違って全員が読み書きの能力を持ち、団結力に富んでいる（後藤資料 2023：14/17）という記述が見られる。

日本人は移住先でも、子どもたちにはすぐに教育を受けさせ、日本人師弟は専門職につき、中流社会入りを始め、他のアジアからの移民とは全く違う存在だったと後藤はいう（後藤資料 2023：14/17）。恐らくこれらは彼の留学先であったアメリカへの日本人移民を指しているのであろう。

また、（移住先の国は）「日本人移民に対する警戒心が強く厳しい制限を行った。これは日本にたいする恐怖心からきている」（後藤資料 2023：14/17）としている。この記述には主語が無いため対象が分からないが、筆者はアメリカ政府による戦前の日本人移民に対する不当な扱いに抗議する為の文章であろうと推察する。

これは明かに、アメリカ政府は昔から日本と日本人を不当に扱ったのだから、先の戦争もそのようなアメリカの敵愾心によって遂行されたものに違いない、という歴史修正主義につながっている。

続けて同資料には日本の特色について、「アジア（原文ママ）とアフリカ（つまり AA 諸国）の中でただ一国、西欧の植民地にならなかった。また封建的で中世的な社会が急速に現代社会となった。いろんな意味で例外的な国家であり、また国民である。いった（原文ママ）どこからこのような現象が起こったのであろうか」（後藤資料 2023：1/18）⁶⁴⁾とある。

その理由として後藤は、日本は災害列島であり、最悪の事態を予想して準備して生きていく思考性があるとする。地震や大雨が頻発するような環境に生きてきた日本人（後藤資料 2023：1/18）は、「自然のまえにお互いに協力することを学んだ」（後藤資料 2023：3/18）」と日本の集団性は独自に発生したものであり、「排外主義ではない」とするが一方、日本が

戦った相手である「アメリカ人から見て『非白人』は愚鈍、怠惰、無気力、無節制、不潔、無責任の塊に過ぎない」(原文ママ)としている。

同資料から(後藤は)「日本には排外主義はないが、アメリカには差別的な偏見による排外主義的要素がある」と主張していると読めてしまうのは、筆者の偏見であろうか。

同資料には日米戦争の帰結について次のように書かれている。

「本来ならば第二次大戦は有色人種の解放、平等の実現という全人類史上の最大の出来事のために戦った日本である。もっと賞賛されてしかるべきである。だがやはり白人に刃向かったというのは消し去れない罪なのだろう」(後藤資料 2023:7/33)⁶⁵⁾。

後藤による大戦についての歴史評価は、「第二次世界大戦は、それまでの白人優位世界の解体と変化のときであり、さらに白人による圧政から解放された諸国の歴史でもある。大戦後にはアジア(原文ママ)の諸国家がすべて独立し、引き続き60年代にはアフリカの諸国がすべて独立した」(後藤資料 2023:1/33)という言葉に集約されている。

また、1952年に至るまでのアメリカによる統治について後藤は、「アメリカは占領をつづけて日本の社会の改造、その精神性の改変をはかった。国際法では勝者は相手の宗教、社会、また価値観の改変を企ててはならないのであるが、アメリカはそれを破った」(後藤資料 2023:7/33)⁶⁶⁾としている。

これら後藤の記述には歴史評価の記載があるため、本来ならば根拠資料を呈示すべきものである。しかし後藤は、「本書は歴史書ではない。小生が論じようとしているのは宣教学である」(後藤資料 2023:39/33)」と歴史的根拠を示す必要はないとしており、自身の歴史観が客観性を持つかどうかについての立証を自ら放棄している。

その上で同資料には「『日本が野心をもってアジア(原文ママ)の近隣を侵略し、多大の痛みを与えた、そのことを日本人クリスチャンの個人々人

がその罪をあたかも自分のことであるかのごとく認識し、告白し、その痛みを感じるときに日本宣教は前進する……』という戦争責任論だけのご免蒙りたいのである」(後藤資料 2023: 30/33)、「これは歴史的な現実を直視しない、手抜き、かつ幼稚な歴史理解であり、これを続けている間は日本のキリスト教会はやせていくのみである」(後藤資料 2023: 33/33)と日本の教会の将来に対して警鐘ともとれる文章が記されている。

いい換えれば、後藤の歴史観は日本の「キリスト教平和運動派」が歴史認識において引用する村山談話⁶⁷⁾の否定である。後藤はこのような修正歴史観に立った上で、「日本悪人論を基本として宣教の方策をたてようとする態度は歴史に対して忠実ではなく、また不毛である」(後藤資料 2023: 30/33)とする。

さらに同資料には、主流派プロテスタントの現状について、「ドサクサの中の茶番劇」(後藤資料 2023: 22/28)⁶⁸⁾である東京裁判について(主流プロテスタントがその)「史観を堅持することがキリスト者のあるべき姿であり、日本宣教の原点としている」(後藤資料 2023: 22/28)⁶⁹⁾と批難する。

また彼は、「キリスト教会だけが東京裁判を盲信し、これの事実関係を改めて洗い出そうともせず」に(後藤資料 2023: 22/28)「『戦責問題を信仰告白の原点』であるが如く扱う」(後藤資料 2023: 22/28)のであれば「これでは日本宣教は前進しないのは当然である」(後藤資料 2023: 22/28)としている。

つまり、後藤は主流派のプロテスタントは歴史認識の誤謬によって宣教論を歪められており、その結果が今日のキリスト教会の現状⁷⁰⁾なのだと主張しているのである。

では後藤は、何が主流派プロテスタントの歴史認識を狂わせてしまったと考えているのであろうか。同資料からは、戦後の日本を統治したGHQによる「占領政策」の中にその理由を見いだすことができる。

同資料には、「占領軍は日本人の特性の自分が属する集団を大切にする態度、すなわち家、郷土、国家そうして天皇を重んじる態度を癒やし難い

罪と見た。それこそが世界を征服しようとする侵略者的性格を生み、また略奪と荒廃を周囲に生みだした悪の根源であるとした。そうして小学校の教科から日本歴史と日本地理と修身を除かせた。地理と歴史を排除し、日本人がそれらについて無知となれば、国を愛することが薄くなると考えたのである」(後藤資料 2023 : 4/16)⁷¹⁾と自説が展開されている。

後藤は占領軍が、「天皇を重んじる態度を癒やし難い罪と見た」(後藤資料 2023 : 4/16) とし、その思想を主流派のプロテスタントが受け継いでいるとしているのである。

ここで、後藤の考えを補完するために、序章でも紹介した西岡力の発言を紹介する。序章でも少し触れたが西岡は、「第7回 日本伝道会議 <分科会31>『日本宣教へのパラダイムシフトを考える』～「歴史認識問題」と「日本宣教論」からの提言～」で講演を行っており、この講演内容はYouTube にアップされている⁷²⁾。

内容を要約すると西岡の講演は、今日の日本は日本民族性悪説の檻から抜け出していないとし、「その証拠」として、日本国憲法前文において日本民族性悪説が織り込まれているというものである。西岡は、日本国憲法の前文は、「日本は」すぐに戦争を始めてしまう悪い国家である一方で、「日本以外の諸国民」は平和を愛すると宣言しているものだという。

また憲法9条問題には日本人はすぐに戦争をはじめてしまうため、日本民族に武器を持たしてはならないという、日本民族性悪説が込められているとし、戦後の日本のキリスト教界はこのような日本性悪説を信じているのではないか、だとすればそれはイエスの教えに反する、と疑問を投げかけていた。

西岡は、白人もキリストの教えに反した罪があるのであり、なぜ日本だけが悪いと言う歴史観に自らしばられるのか、これが「日本のキリスト教の問題」であるとし、最後に「日本を愛さなければ、日本宣教はできない」と締めくくっていた。

(3) 後藤による日本宣教論のまとめ

後藤と西岡の主張には共通点が多い。以下に後藤の資料から、彼らが主張する日本宣教をまとめてみたい。

1. 聖書主義の確立

「聖書のテキストの把握が必要である。そうしてアジア・アフリカ（原文ママ）の文化と融合したキリスト教の確立が必要である」（後藤資料 2023：1/7）⁷³⁾

2. 左翼思想との決別

「いま日本の教会は著しく左傾していて、戦没者の慰霊、または名誉回復もできない状態である」（後藤資料 2023：1/7）。

3. 「アメリカの宗教」からの脱却

「本当にキリスト教は『アメリカの宗教』なのか。これは日本宣教を志す者にとって極めて重大な問題である。福音の真理は宇宙的なものであって、ローカルなものではないはずである」（後藤資料 2023：3/7）

4. 戦没者慰霊

「いま日本のキリスト（原文ママ）教会は戦没者慰霊に関することは猛烈に反対しえちる（原文ママ）」（後藤資料 2023：4/7）。

「12月8日はまさに世界の人種解放の一台（原文ママ）記念日であって、国連の世界記念日として祝われるべき日なのである。ところが現実には日本のキリスト教会の主導によって忌まわしい日、日本が世界征服のための戦争を始めた日として記憶されているのである」（後藤資料 2023：4/7）。

「クリスチャンには慰霊という理念はないが、これをクリスチャンにも理解できる形でいえば、それは戦没者の死の世界史的意義の認識であり、彼らの死によって世界の平等が成立したことを記念し、かれらの死者の人格を認識し、顕彰する時であり、また遺族のための慰めの時である」（後

藤資料 2023：5/7)

5. 特攻隊兵士の顕彰

「かれらの死に対して、万感の思いをもって、その状況を悲しみ、同情の念を表明し、また自分の生命を投げ出して日本を守ろうとしたその勇気と犠牲を讃えるべきである」(後藤資料 2023：6/7)

(4) セミナー参加者からの提言

最後に、後藤以外のメンバーが配布した資料内容をまとめたものを紹介する。

- 1 福音的先祖供養を考える。
 - 2 前の大戦の意義を再評価し、戦没者の慰霊、特に特攻兵の慰霊を行う。
 - 3 二者択一的な宗教観念を押しつけない。
 - 4 神道・仏教などの既存宗教を尊重する。
 - 5 皇室を侮蔑否定せず、伝統を尊重する。
- (配付資料 2023)

上記は後に作られた同団体の運営する神学院テキスト(案)に書かれていた内容とほぼ同じである。

ここまでキリスト教愛国主義派の主張を述べた。しかし、主張されている歴史的な事実を裏付ける資料が皆無のため、真偽の確認は不可能である。

そこで筆者は、彼らが批判する戦争責任告白を重んじるキリスト教平和運動主義派グループの主張を見ていき、これを後藤を始めとするキリスト教愛国主義派に対する見解と比較検討することにした。

3・4 キリスト教平和運動主義動派

(1) キリスト教平和運動主義派の概要

宗教者が平和の為に活動するのは当たり前のことのように思われている

が、日本の近代宗教史をたどれば、それが当たり前のことでなかったことが分かる（大谷 2021：4）。

大谷栄一は、戦後日本の宗教界は戦争協力に対する「懺悔」から出発したという（大谷 2021：4）。一例をあげると、日本基督教団は1941年に各派に別れていたプロテスタント諸派の合同によって設立され、「基督教報国会」、「教会報国会」、「軍用機献納運動」、「教団戦時報国会教会国民貯蓄組合」などを通して教会の資源は国策遂行のために動員された（大谷 2021：112）。

戦中時代に若かりし頃をおくった土肥昭夫⁷⁴)は、帝国憲法下の戦時体制は天皇制ファシズムの軍事体制であったとする（土肥 2012：16）。土肥は、当時の天皇制について、「それはまず政治の機構であり、国家権力の支配体制であった」という。また土肥は「それは天皇に一切の権力が集中し、天皇に直属する文武官僚がこの権力を行使するという政治体制であった」（土肥 2012：16）としている。

敗戦によって天皇制権力体制は終わり、天皇体制による権力行使は不可能になった。しかし、日本国憲法によって天皇の存在そのものは温存されており、従前とは違う形で政治利用されるのではないかとの危機感が、少なくともキリスト教の側には常在していた⁷⁵）。

「二度と戦争を繰り返してはならない」、これが日本のキリスト教平和運動主義派の根幹であり、戦争体制を構築するかもしれない要素、天皇制の政治利用に対する危惧がいつもそこにはあった。

ゆえに、「キリスト教平和運動主義派」が靖国神社参拝に代表される政治による宗教利用への反対表明をしてきたのは、その危惧が根幹にあったからで、キリスト教愛国主義派が主張するような「天皇排除」が根幹にあったわけではないと、筆者は自らの教職者時代の経験からも考えるのである。

(2) 戦後日本のキリスト教平和運動思想——靖国神社参拝と皇室問題

長い間、北海道で靖国・天皇制問題に関わってきた佐藤幹雄⁷⁶)は、天皇

制国家によって生みだされた幻想ならびに、その根底にあるものについて3つの命題を提示している。

第1は「血統共同体幻想」であり、第2は「民族共同体幻想」である(佐藤 2011: 151-152)。佐藤は、「日本国民とは元々一つの血のつながった家族である」という考えを「血統共同体幻想」と呼び、また、日本人の血がながれていない人は、日本国籍を取得しても「外人」とみなす風潮について「民族共同体幻想」だする(佐藤 2011: 152)。

第3は「国家共同体幻想」である。佐藤は、これは靖国神社参拝の思想にはっきり表されているとし、戦争で死んだ軍人は、国家のために尊い命を捧げた人々であるとみなす考えを持っている人に対してこの用語を用いている(佐藤 2011: 152-153)。

佐藤の「3つの幻想論」から導かれる結論は、「この3つの幻想の上に天皇制が成り立っていますし、また、天皇制がその思想を生み出し続けているのです」(佐藤 2011: 15)という言葉にあらわれている。

その上で佐藤は、日本人の心情について、「戦後、新しい日本国憲法になったわけですが、わたしは、考え方の底にあるものは基本的に変わっていないと思っております」(佐藤 2011: 154)という。さらに、なにゆえに天皇の地位が「日本国民の統合の象徴」なのか、なにゆえに国民が天皇を軸にして統合されなければならないのかと佐藤は問う(佐藤 2011: 154)

明確に書かれてはいませんが、「現憲法下における天皇の地位が旧憲法と同根であるなら、再び、天皇制イデオロギーによって天皇や靖国思想が利用され、戦争国家への道を歩む危険があるのではないか」⁷⁾と佐藤は危惧していたのである。

土肥は、戦前の天皇制に対して「うらみ、つらみはつきない」としつつ、(戦前キリスト教の)背景として天皇制ファシズムによる軍事体制があったことを指摘している(土肥 2012: 16)。土肥は天皇制とは政治機構であるとしつつ、戦後は天皇制の問題をイデオロギー問題として、これを思想

的、社会課題として包括的にとらえようとする考えがすすめられてきたとしている（土肥 2012：17）。

土肥は、天皇制に関する研究をまとめ、天皇制の政治機構が明らかになったとして、「天皇制国家権力の強権的支配が日本人の精神構造や思惟方法によって、オブラートのように包みこまれてとらえられ、そこに生まれた天皇制イデオロギーはまことに柔軟で、無限抱擁、融通無碍を支配してきたことが明らかになるだろう。君権ではなくて、君恩、飴と鞭ではなくて、涙の折檻と愛の鞭による統合が万国に比類の無い国体をうみだしたのである」（土肥 2012：18）としている。

土肥がいわんとするところは佐藤が示した「3つの幻想」に通じるところがある。大日本帝国憲法と日本国憲法とでは天皇に対する規定が全く違うにも関わらず、「天皇に対する民衆感情」には大きな違いは生じていないと土肥も佐藤も主張しているのである。

以上からも戦後天皇制についての、「例のほほえみと身振りで日本国民を統合する機能をはたすようになってきた」（土肥 2021：21）という土肥の主張は的を射たものであると筆者は考えるのである。

では、明治以降の天皇制が果たした役割はどのようなものだったのだろうか。土肥は、「近代日本の政治は天皇の仁政といえるだろうか（土肥 2012：29）」と問う。土肥が出した答えは、「天皇の権能を行使したのは官僚や軍部であり、その結果として栄達と繁栄を享受したのは彼らや資本家であって、労働者、農民、中小商人ではなかったのである。天皇のあわれみは、これらの権能をカモフラージュして、支配階級への隷属奉仕を激励するための手段」（土肥 2012：29）というものであった。

土肥のいう「あわれみ」はその意味は曖昧なものである。しかし、それゆえに神道・仏教・キリスト教それぞれにとって意味ある表現ともなっている。この「天皇のあわれみ」は天皇制を好意的に受けとめるものにとっては「善」であり、天皇制に敵意を持つものにとっては「偽善」と受けとめられよう。

また、土肥は天皇の役割の側面について、「天皇は国家の主権者としての権力を神聖なる権威をもって、戦争にむかっていく支配者と和合し、その政策を是認する裁可をしたことも否定できない」（土肥 2012：31）とする。神聖なる権威とは、つまりは宗教的な力を意味しており、それはもちろん戦争期におけるいわゆる国家神道を基盤としているのである。つまり土肥は、近代の天皇制を政治的な機能を宗教的な基盤の上に構築したものであると主張しているのである。

土肥は1975年に、「日本のキリスト教が天皇制の持つ根深い問題を解明していたか、それへの的確な判断と行動を自分のなかからひきだしていたか、というと、それはできなかったといえるだろう」（土肥 1975：36）と1つの結論を出しているが、それは土肥が属した日本基督教団の戦前戦後の歩みに対する評価でもあったと思われる。

キリスト教にとって近代天皇制が問題になるのは、「神種的存在として仰がれた天皇の下での序列化」と、「普遍的な価値基準による人間教育ではなく天皇制国家へ忠誠を尺度とした教化」であると土肥は述べているのである（土肥 1975：65）。

このような序列化と教化は戦後になってから直接的に強要されることはなくなった。しかし、靖国神社国営化法案、元号法案などを通して、形こそは変えているが、戦前の天皇制の価値観（国家神道を基盤としたもの）が国民の中へと浸透化され、ゆえに国権による戦時体制構築への準備が為されているのではないかということは、土肥をはじめとしたキリスト教平和運動主義派だけではなく、多くの宗教者が危機感を抱いている事態だったのではないだろうか。

靖国神社の由来は1869年、旧日本陸軍の創設者大村益治郎によって立てられた「東京招魂社」であり、幕末や明治維新において天皇の側に立って命を落とした人々を祭るためのものであった。これが1879年に「靖国神社」と改称され、陸軍省と海軍省の管轄下に置かれることになった。以降靖国神社には、主として幕末から太平洋戦争までの約250万人の戦没者

が神としてまつられており、その目的は、戦死者を賞賛し、神道的儀式によって慰霊するものであると佐藤は述べている（佐藤 2011：19）。

このような性格を持つ靖国神社が国営化されることは信教の自由に反するものであり、キリスト教平和運動派にとってはなんとしても阻止すべきものであった。筆者は1982年から6年間、日本基督教団京都教区の教会に属していた。当時、靖国神社に対する政府の姿勢は教会内においても問題され、批判するのが当然のように教えられ、京都在住の期間、何度も反靖国・反天皇制に関わるデモ行進に動員された経験がある。

日本改革派教会に所属していた松谷好明⁷⁸⁾は、「近年の日本宣教論と天皇題」について、「天皇制は政治問題であって、宣教論としてそれを議論することは福音宣教上望ましくなく、伝道と教会形成に専念すべき」と考える教会やキリスト教徒が、これまでよりも増えてきた感があるという（松谷 2018：56）。

さらに松谷は、「日本を愛するキリスト者の会」について、戦後アメリカの占領政策によって奪われた日本人の誇りを取り戻し、日本文化の土台である天皇制の上に立って宣教を進めるべきだとして天皇制を好意的に取り上げていると紹介している（松谷 2018：56）。

松谷は彼らへの考査を通して、はたして皇室神道の祭司的な存在である天皇への崇敬とキリスト教信仰は同居できるのかと問いつつ、「皇室神道は、聖書的キリスト教から見れば、まさに偶像崇拜そのものであると言わねばなりません」（松谷 2018：75）という。松谷の思想はカルヴァンを祖とする改革派を代表するものであるが、それは「天皇・皇室は、愛と憐れみに満ちた真の神ではなく、神ならざるものを拝んでいるといわねばなりません」（松谷 2018：76）という記述に凝縮されている。

改革派の宣教論によれば、聖書に根拠づけることができないものはすべて「神ならざる」ものであって、他宗の神もまた「神ならざる」ものとなる⁷⁹⁾。つまり、松谷は日本の皇室を否定しているのではなく、神以外の権威を崇拜することを否定しているのである。

以上の視点に立つがゆえに松谷は、「教理的、神学的に見れば、カトリックの聖人崇拜や死後洗礼、死者のためのミサ、仏教的、神道的習慣（国家神道の神社の参拝も！）の許容、告解とミサなどは、日本宣教をプロテスタントの場合よりも、より容易にしてきた面とも言えます。しかし、これらの教理と実践が聖書的であるととても考えられません」（松谷 2018：86）とする。松谷は政治的な意味において国家神道を否定しているのではなく、あくまでも「聖書主義に反する」という点からこれを否定しているのである。

松谷は「プロテスタントとしてのわれわれの宣教上の課題」として、「結局『天皇神聖性』と『日本人の神的独自性』を明確に否定する、『聖書的なプロテスタント信仰告白』にたって宣教しなければ、天皇をいただく国において真のキリスト教会を形成することはできないことを改めて確認したいと思います」（松谷 2018：88）と自論を締めくくっている。

(3) キリスト教平和運動主義による宣教論

では、実際にキリスト教平和主義派が実際にどのような形でプロテスタント宣教論に影響を与えているのかについて、教区ごとの声明や発表の概要を見ていくことにする。

1. 日本基督教団九州教区の宣教基本方針・方策

「合同教会である日本基督教団を形成するわたしたちは、以下の方針に基づいて祈りつつ活動します。1) イエス・キリストのみを主と告白し、それ以外を主とすることを斥けます。2) 神の業に参与する礼拝をささげ、福音を広く分かち合うことに日々努めます。3) 『戦責告白』の意を受け継いで戦争を斥け、平和をつくり出します。4) 互いに支え合いつつ、九州教区がおかれた地域の様々な課題に誠実に向き合います。』⁸⁰⁾

2. 日本基督教団京都教区宣教基本方針

「私たちは、聖書に証しされている神を唯一の主として崇める。それに

もかわらず、かつての大戦においては、この唯一の神をないがしろにして天皇を崇め、戦争に協力した歴史的事実がある。このことを深く反省し、『第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白』（1967年3月26日）を重んじる。

私たちの信じる神は、人の苦しみを見、叫びを聞き、痛みを知る神である。その神がイエス・キリストにおいて生きて働いておられる。イエス・キリストの宣教は、さまざまな人に手を差し伸べ、それぞれの苦しみを共に担い、神の赦しの愛を伝えるものであった。そしてその福音を宣べ伝え、神のわざに参与する宣教の働きにイエス・キリストは私たちを招いておられる。

私たちは、現実から聖書に聞き、また聖書から現実を見るという姿勢を重んじ、課題に取り組んできたが、さらにイエス・キリストの御心に問いつつ、宣教の業を担っていく⁸¹⁾。

3. 日本基督教団神奈川教区形成基本方針

「我々は、1941年の日本基督教団の成立、1954年の『教団信仰告白』、1967年の『第二次 大戦下における日本基督教団の責任についての告白』、1969年の日本基督教団と沖縄キリスト教団との合同等、今日改めて問い直すべき内容を含む課題を負う教団の現実を踏まえ、理解や方法論の対立を伴うその他の諸問題についても、意見を誠実につき合わせ、対話を重ね、聖霊の導きを求めつつ、なお一つの地域的共同体としての教区形成を目指すことを基本方針とする⁸²⁾。

4. カトリック教会における平和運動

カトリック内のキリスト教平和主義運動派の中心である「日本カトリック正義と平和協議会」（通称「平正協」）の発足は、1967年、ローマ教皇パウロ6世が教皇庁に「正義と平和評議会」を設立し、同様の組織を作るよう世界中の司教協議会に呼びかけたことに端を発する。正義と平和協議会は、今日の課題として次のような情報を発信している⁸³⁾。

「日本国憲法をまもることは、日本司教団の基本姿勢であり、正義と平和協議会の核ともいえる中心課題です。近年とくに顕著になった政府の改憲の動きに反対し、具体的な対応策を検討するための『改憲対策部会』を組織しました。

また特に憲法9条については、宗教を問わず3人一組で独立したグループをつくり活動と呼びかける『ピース9（ナイン）』事務局業務を担当しています。ピース9（ナイン）事務局に登録してくださったグループには、憲法9条をまもるためのさまざまな活動の便宜を図ります⁸⁴⁾。

同会は2019年11月には「政教分離」憲法原則の徹底を求める声明を出しており、その内容は下記の通りである。

「先ごろ挙行された『即位礼正殿の儀』『大嘗祭』等、天皇代替わりにかかわる皇室祭祀に国が関与し、公金を支出したことに遺憾の意を表します。

日本カトリック司教協議会は、今回の天皇代替わりに関連して、すでに2018年2月22日に内閣総理大臣宛て『天皇の退位と即位に際しての政教分離に関する要望書』を発表し、『天皇の退位と即位に関する一連の行事にあたって、日本国憲法が定める政教分離原則を厳守し、国事行為と皇室の私的宗教行事である皇室祭祀の区別を明確にすること』を求めました。

ところが政府は、『平成の御代替わりに伴い行われた式典は、現行憲法下において十分な検討が行われた上で挙行されたものであることから、今回の各式典についても、基本的な考え方や内容は踏襲されるべきものである』（2018年4月3日閣議決定）として公費を支出し、三権の長など国家機関の枢要なメンバーも出席させました。

『天皇代替わり』儀式の一部は、天照大神の神勅に由来する神道儀式に即して挙行されました。とりわけ『大嘗祭』は、神道儀式を経て即位した天皇が神格化される儀式として、宗教性を濃厚に帯びていることは政府も認めています（1989年12月21日閣議口頭了解）。また天皇が高い位置から即位を宣言することに「国民」を代表する首相らが下から応える儀式である『即位礼正殿の儀』も『国民主権』原則との齟齬が懸念されます。

本来皇室の私的な宗教祭祀であるさまざまな儀式、とりわけ戦前の日本で、神権の天皇像を国民に知らしめるための儀式であった『大嘗祭』に公金を支出し国が関与することが、日本国憲法の政教分離原則にそぐわないのは明白です」⁸⁵⁾。

3・5 小括

本章では、「キリスト教愛国主義派」と「キリスト教平和運主義動派」の主張とその背景にあるものを比較した。その結果、両者の間にある靖国神社参拝や皇室論、また歴史修正主義を巡る解釈の間に以下のような齟齬があることが明確となった。

戦後の「キリスト教平和主義運動派」の原点は「国家による宗教利用」、とくに神道と天皇制を通して日本が戦時体制を構築していくという、挙国一致戦争システムに対する危機感から生まれており、左翼的思想から「反天皇制」を唱えているわけではない。また日本文化そのものを否定しているわけでもない。

「キリスト教平和主義運動派」全体の背景には、カトリック平正協のように政教分離、松谷がいう政治的な思想を福音宣教に持ち込むべきではないとする思想が根底にある。確かにその中に左翼的思想運動的な過激な活動グループがあることは否定できないが、これは全体のごく一部が目立っているにすぎない。しかし、その活動の過激さゆえに、この彼らがしばしば「キリスト教平和主義運動派」として批難対象となっているのである。

一方でキリスト教愛国主義派は、1970年代以降のキリスト教平和主義運動派、つまり、天皇制と国家権力への対抗運動に対して激しい嫌悪感を抱いており、その結果として彼らの主張は第1章に示した右派的傾向をほぼトレースするような内容となっている。

彼らの思いは先の「キリスト教平和主義運動派」の中の一部に見られる「過激ともいえる左翼的運動」を矛先としており、それが広がってキリスト教平和主義運動派全体に向けられたということはできるかもしれない。

しかし、それが「過激な左翼的運動への反動」だとしても彼らを否定することを目的として、自らの「キリスト教信仰」と「キリスト教宣教」を結びつけ、その過程においてアメリカとの戦争の再評価と、日本文化としての天皇制を肯定し、特に戦没者を慰霊するという行為を正当化することに筆者は疑問を感じるのである。

断っておくが、筆者は「キリスト教平和主義運動派」の主張や左翼的な行動をする人々に同意しているわけではない。また感情的に「キリスト教愛国主義派」を排斥しようとしているわけでもない。

本研究は「精神世界」と福音派を中心とした「キリスト教愛国主義派」の両者から同様の内容が発信されていることを背景としてなされている。

第2章で示したように精神世界から発信されている情報は、たとえそのソース・ドキュメントがいかなる類のものだとしても一応の論拠が示されている。またこれらと反対の情報発信や行動を起こしている「キリスト教平和主義運動派」からも論拠となる資料が示されている。

しかし、「キリスト教愛国主義派」の主張には現時点（2023年11月）で、論拠資料が一切示されておらず、独自研究に類するもの、「信用に値しないトンデモ論」といわれかねない点に、疑問を呈しているのである。

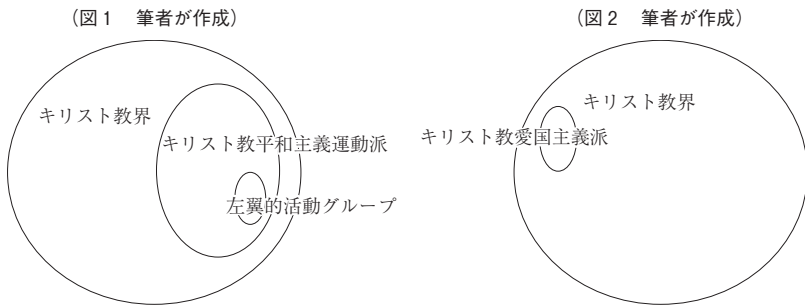
この根拠資料のないという点において筆者には「彼らの宣教論」が感情から出た「キリスト教愛国主義派の国家観を正当化する道具」として、主従の逆転が起きているように思えるのである。

「キリスト教平和主義運動派」の理論が果たして現在の社会事情に沿っているものかどうかという疑問は確かにある。しかし、彼らの主張は諸々のキリスト教諸派間で論争し、協議し、あるいは資料を突き合わせながら構築されてきたものである。

しかし、「キリスト教愛国主義派」の主張は「天皇制擁護派の宣教論」ありきではじまった感情にまかせた宣教論のように思えてしまうのである。確かに「キリスト教愛国主義派」はキリスト教界において主流派ではな

く、彼らの中心となっている福音派の一部でしかないという主張もあるだろう。

しかし、「キリスト教平和主義運動派」が日本のキリスト教界全体の中の1つの流れであり、過激な左翼的運動はその中のさらに一部（図1）なのに対し、「キリスト教愛国主義派」はそれ自体が日本のキリスト教界全体の中での1つの動きであり（図2）、「キリスト教平和主義運動派」のそれとは立ち位置が違うのである。



このように第2章、第3章から検討すると、精神世界関係者の一部は古神道ブームや前期靈性思想の延長線上から自然と右派的な情報を発信するに至っている。

これに対して、「キリスト教愛国主義派」は左翼運動化した「キリスト教平和主義運動派」への反動と、「天皇（皇室）擁護」、「歴史修正主義」等のイデオロギーのみで情報を発信している。

とはいえ、情報発信に至る背景は違うものの、「精神世界とキリスト教（福音派）の一部からシンクロしたかのような情報が発信されている」ように見えるという事実は変わらない。次章では、両者の具体的活動について事例をあげて比較検討をすすめていくことにする。

第4章 「右派的情報を発信する精神世界関係者」と「キリスト教愛国主義派」の活動

4・1 右派的情報を発信する精神世界の人々の活動

(1) 神戸護国神社マルシェ

2023年3月25日及び同年10月15日に神戸護国神社にて「大和こころのマルシェ」が行われた。

同マルシェを主催したのは兵庫県にある「靈性にかんする協働組織」襖ぎカフェ（伊藤 2022：314-316）の世話人（60代男性 兵庫県在住）と、龍体文字の読解や縄文文化、古事記・日本書紀より前の書物についてなどの勉強会を主催している女性（40代女性 兵庫県在住）で、同女性の勉強会では「GHQに骨抜きにされた大和民族の心の復興」、「天皇（皇族）を中心とした靈的日本を取り戻す」、「参政党の支持」などの活動が行われている。

女性は2022年7月に普段参拝している神社へ行った際に「大和民族の心の復興のためには日本の為に命を落とした人々を忘れてはならないというお告げを受けた」という。

そこで、知り合いであった襖ぎカフェの世話人に相談したところ⁸⁶⁾、同組織のメンバーから「それならば、英霊を祀っている護国神社が岐路に立っているのです、そこで何かできないか何か考えてみてはどうか」といわれ⁸⁷⁾、襖ぎカフェの世話人と2人で普段の活動場所に近い神戸護国神社を訪れた。

女性は、「(普段参拝している神社の) 御神木や磐座一つを考えても実際はそれらが発するパワーや波動を通じて(宇宙意識と)繋がろうとしている」、それならば「国のために魂をかけた人の波動が満ちている護国神社にも大きなパワーがあると思った」という（伊藤 2023b：20）。

2人は神戸護国神社を会場にしてマルシェを開催できないかを打診することにした。事前に見に行っていた襖ぎカフェの世話人は、「都道府県には

必ず護国神社があり、直接戦争に行かなくても日本ために亡くなった英霊が祀られているが、『遺族が減り護国神社自体が取り壊されて彼らが忘れ去られていく』と聞いた。神戸護国神社に行ったところ、普通の神社とは違う高い波動を感じ、この神社でマルシェを開けないかの打診を行うことにした」ということだった（伊藤 2023b：20）。

2人の提案に対して同神社の神職は彼らの普段の活動やマルシェの内容などについて聞き、何度か打ち合わせをした後、3月に最初のマルシェが開催された。また、その成功をうけて10月には2回目のマルシェが開催された。

筆者も参与調査者として2回とも同マルシェに参加し、運営スタッフから話を聞くことができた。また同神社の神職も護国神社が無くなっていくことに危機感を抱いており、「こうやって英霊を愛する気持ちで集まってくれる人達が会場に使ってもらえることに感謝している」と出展者らに話していた。

3月のマルシェ当日には運営室に街宣右翼の代表が来ており不穏なものを感じたが、「このような企画は応援したいので、他の護国神社でもイベントができるように他の護国神社にも打診したいがどうだろうか」という提案であった⁸⁸⁾。

また、筆者が驚いたことの1つに歴史修正主義系の書籍を出版販売、講演などを行っている団体がブース出展しており、その少し先では中国・在日コリアングループがキッチンカーを出展していたことがあげられる。

これについて、主催者の女性は、「日本弱体化計画によって歴史は歪められ、中国がグローバリズムの中心問題となっているのは事実だ」とした上で、「それらを含めて、魂が浄化され本来のパワーを取り戻した人が増え、波動が高まれば融和のエネルギーが満ち、人は変わるはず。人が変わっていけば国も変わる」、「歴史は修正されるべきだが、宇宙意識との繋がりの中で必要な部分の修正はなされていく」とし、その趣旨を理解した人以外は出展させないようにしているということだった（伊藤 2023b：20-21）。

筆者はこの歴史修正主義系の書籍販売をしているブースで聞き取りを行ったが、「間違った歴史は修正すべきで、そのような歴史を広める人は排除するべきだとは思う」と前置きをした上で、「それを差し引いても、日本の英霊のために一緒に参拝しようという気持ちで護国神社に来ているのなら、そちらの方が良いことに決まっている」と護国神社の存在意義を語った後に冊子を渡してくれた⁸⁹⁾。両ブースは10月にも同様に出演していた。

また、10月には参政党のメンバーによる飲食系ブースも出演しており、大々的な政党の宣伝はしていないものの、同出演スペースには、興味を引くように参政党の政策等が書かれている広報ビラ置いてあった。



(写真4 筆者が撮影)



(写真5 筆者が撮影)

同マルシェでは3月、10月ともブース出演だけでなく、英霊にちなんだ映画も上映され、3月には「島守の塔」、10月には「凜として愛」が選ばれ、上映のために用意された30畳ほどの部屋は満席となっていた。

(2) マルシェ以外での活動

右派的情報を発信する精神世界関係者は先のマルシェ以外にもインターネットを使った活動や「草の根的活動」を通じて発信情報を広げ、賛同者を増やしている。以下に筆者が調査をした活動についての概要をいくつか示す。

1. 森林保護運動

2023年11月1日～11月7日にかけて、森林を伐採してのソーラパネルの設置反対や、捕獲した野獣を殺傷しない運動が「日本人に還ろう」と題して行われた。

これを主催した女性（40代 兵庫県在住）は飲食店を経営している。女性は、飲食店（居酒屋）の常連客をよんで集会（酒類を含む飲食無料）を行い、「森の未来を考えない行政主導の企業政策や、生き物の命を無駄に殺傷する行為によって日本は神々の怒りをかっている」、「神域日本が海外からの脅威に晒されている」、「神威を取り戻さなければならない」とし、食事会に来ていた人々とグループ LINE を作成し電子署名のサイトへと誘導していた⁹⁰。

最終的にグループ LINE は200名弱にまでに膨れ上がり、多くの人々が署名活動に参加していた。

もっとも精神世界が自然保護や環境保全について熱心であることは20年以上前から指摘されており（島藺 2007：38）、この活動そのものに新しさがあるわけではない。

彼女らの運動は内容的にみればニューエイジのそれと同じではあるが、集会では「神威の衰え」の原因の1つに「皇族への敬意が薄れたこと」が掲げられている点にその特徴があるといえよう。

女性は、「天皇陛下をはじめ皇族の方々が日本の自然の霊を支えてきたにもかかわらず、それを心から敬う心が薄れたことが、今の国政や企業をおかしくしてしまった」と、現在の自然破壊等に向かう日本の状況を作り

出したのは「天皇（皇族）への崇敬心が薄れたことにある」とし、「真の神道の復活と、天皇への崇敬」の重要性について述べていた。

2. 船上折り紙大会

2023年夏に行われた「廣田山荘 大和こころのマルシェ」⁹¹⁾で、同所を訪れていた男性（60代 大阪府在住）から、「船上折り紙大会」の案内を手渡された。

内容は、「海外から招待客を迎え、10人乗りの小型船舶で洋上で折り紙を折り、マリーナに戻ることを繰り返すだけ」とのことで、「見に来ないか」と誘われたが同日のマルシェからの連続でもあったため、連絡先を教えてもらい、後から聞き取りをさせてもらう約束をした。

翌週になってから男性に連絡をしたところ、「作品を見に来ないか」との誘いがあったので男性宅を訪れたところ⁹²⁾、折り紙を組み合わせた数々の作品が並んでおり、全てに祝詞のような文字が書かれてあった。

この折り紙大会には外国人、日本人合わせて30人が参加し、洋上と港を4往復して午前中から夜まで折り紙を折っては戻ってきたということだった。

「何のためにそのようなことをするのか」と筆者が聞いたところ、男性は「いくら洋上が風いているとはいえ、揺れている中でどれだけ複雑なものが折れるかを競うことで、日本人がどれだけ器用なのかを知り、学んでもらうことが目的だった」という。

さらに男性は、「中には普段は綺麗に折っていても洋上では外国人よりも上手く折れない日本人もおり、いかに日本人が甘やかされた環境にいるかが分かった」と、「本来の日本人の優秀さ」を認識することと「それを維持すること」が重要で、「本来の霊力を取り戻し、日本人の誇りを取り戻すためにも日本文化をもっと大切にしないといけない」としていた。

4・2 キリスト教愛国主義派の活動

キリスト教界の中ではマイノリティとはいえ、同じような思想を持って

いる団体は大小数えればいくつがある。本項では活動が目立つ2つの団体を中心にその活動状況について見ていくことにする。

(1) WEB上、冊子、講演会

1. 兵庫県に拠点を置くキリスト教愛国主義派の団体のWEBサイトの設立趣意書には次のようにある。

「現在起こりつつある日本人の“精神的バビロニア捕囚”からの解放を知ってか知らずか、一部キリスト教ジャーナリズムは、朝日新聞のこれ迄の日本を貶める報道に追随しているとしか思われぬような記事を掲載し続けています。遺憾ながら、この様なあくまでも所謂“自虐史観”に固執しようとする姿勢は、日本のキリスト教界全体を覆っている誤る常識（原文ママ）となっているようです。それは見方によっては、クリスチャンの純真さに起因する良心の発露とも考えられますが、他方、真実に目覚めつつある多くの日本人にとっては、キリスト教というのは、相も変わらず日本人を貶めることに躍起になっている『反日左翼の宗教』としての誤解を与え続けることになりかねません。そこに、今日のキリスト教が低迷している理由の一端があるとも考えられます。かくて私達は、この様な現在のキリスト教界の所謂“自虐史観”に則った言論や決議の蔓延を憂え、もっと公正にバランスのとれた報道や意見が尊重されるあり方を求めます⁹³⁾と全面に歴史修正主義を打ち出している。

同団体ではWEBだけではなく実際に講演会も行っており、過去になされた講演会のトラクト画像を見ることができた。その内容は「日本列島全体を〈巨大な洗脳の檻〉と化したGHQ——その檻から脱するための解毒剤」、「謝罪運動は日本のリバイバルを妨げる——聖書学的視点から」、「日本人よ、自信を持ちなさい!」などで、そこからは「歴史修正主義」や（民族的）「優越主義⁹⁴⁾」、さらには、「天皇家こそ、唯一残されたヘブライの王家のダビデの正統な子孫で旧約聖書に約束されたメシアは、天皇家から出るとしか考えられない」といった日ユ同祖論にも通じる天皇（皇

室) 崇敬を読みとることができた⁹⁵⁾。

また、同団体から出版されている冊子では、「大切なのは日本の伝統文化に生きながら、また自分の置かれた場所にあって、聖書を知ることです」(久保 2021: 2) と日本の伝統文化の優位性が説かれており、神道の神とユダヤ教の神が同じであるとした上で⁹⁶⁾、日本の成功者をあげ、「なぜ彼ら成功した人や富を築いた人々に神道の神を篤く崇敬する人が多かったのか。(中略) だから神は、日本人の信仰形態に多少の不純物や異物があつたとしても、恵みを求める者には、豊かな利益を惜しまれなかったのである」(久保 2018: 7) と神社信仰の正当性と見直しについて記されている記事を見つけることもできた。

この団体の活動には、「キリスト教平和運動派」からだけではなく、「キリスト教愛国主義派」からも批難が出ている。

キリスト教愛国主義派に立つと思われる別のグループの WEB サイトには上記団体に対して、「ここまで来ると、聖書の禁じている偶像礼拝、具体的には混合宗教という深刻な過ちを犯しており、そこで宣べ伝えられた『イエス』は、聖書に啓示されているイエス様とは異なった、違う存在になっています。神道にキリストの光が照らされるのではなく、“キリスト” が神道の暗闇に埋没しただけのことです⁹⁷⁾と神道をユダヤ・キリスト教系の文脈で見直す姿勢を行きすぎだとし、同団体への批判が展開されていた。

2. 次に2023年4月に兵庫県で「宣教会議」を主催した団体が運営する WEB サイトには、「我が国、わが民族にキリストの愛を伝えるためには、まず、徹底的に我が国、わが民族を愛さなければならない。私たち日本のキリスト者は、命懸けで我が国を愛して、白人キリスト教文明の欠陥を告発した昭和天皇に比べて、どれほど我が国、わが民族を愛してきたか。むしろ、我が国、わが民族を憎み、おとしめてきたのではないか。そこへの徹底的な悔い改めなしに日本宣教はない⁹⁸⁾」といった西岡による主張をはじめとした「歴史修正主義」や「天皇(皇族)崇敬」に通じる第1章にあげた右派の情報と同様の内容が発信されている。

しかし、このサイトには下記のような右傾化情報発信への疑問も同時に掲載されていることは見逃せない点である。

大橋秀夫⁹⁹⁾は「こうした歴史認識を不要だと決して考えていない。戦後生まれの若いリーダーたちには、ぜひ知っておいてほしい事柄である。しかし、『21世紀の日本宣教』、あるいは長く続く宣教の低迷を前にして、私たちに必要な喫緊の課題は、現代社会の中における教会形成はどうあるべきか、またそれを導くリーダーとリーダーシップはどうあるべきかを探索することではないだろうか」と同団体の提唱する歴史修正主義に対して同団体の WEB サイト内で苦言を呈しており¹⁰⁰⁾、1. にあげたキリスト教愛国主義派の WEB サイトとは違い、自らを問い直しながらサイト運営をしているように見うけられた。

(2) オンライン礼拝を通しての活動

上記(1)2に所属する牧師は、自らがインターネット上でオンラインチャーチを主催しており、「近くに教会が無かったり通うのに大変な人、また牧師や古参信徒とときまなくなった方へ（中略）どなたでも歓迎です」¹⁰¹⁾とし、普段教会へ行けない人を対象にインターネット上で礼拝を行っている。

筆者がいくつか確認したアーカイブでは、礼拝の構成は「開会祈祷、賛美歌（聖歌）、主の祈り、使徒信条、賛美歌（聖歌）、説教前トーク、聖書の読み、説教、賛美歌（聖歌）、閉会祈祷」という構成になっており、多くのプロテスタント教会の礼拝と同じであった。

同牧師は自ら所属している団体を「キリスト教右派」と名乗っており、礼拝説教に入る前のトークで「アメリカは何の目的もなく感情だけで戦争を仕掛けた」、「戦中のクリスチャンへの迫害は当然のことで、あの程度の迫害で終わったのは日本政府の自制で、西洋の植民地支配に比べたらたいした迫害ではない」、「ホーリネス弾圧事件は事実かもしれないが、彼ら自身が戦争直前にイギリスに献金をしており、弾圧されるのは当然。わきまえが無いだけある」、「彼らは弁護士付きの裁判で全員執行猶予付きの判決

をうけており、尋問中に亡くなった人がいたとしてもたいした問題はなく、誰も虐殺なんてされていない」と自説を展開していた¹⁰²⁾。

もちろん同牧師が主催しているのは「教会の礼拝」であるので、このような自説が毎週展開されているわけではないが、筆者が視聴した数回のアーカイブ中で同様の内容が2度語られているのを確認することができた。

4・3 小括

右派的情報を発信する精神世界関係者とキリスト教愛国主義派の活動を比較したとき違和感をいだいたのは、キリスト教愛国主義派の“活動の方向”である。

今回とりあげた団体以外にも小規模な右傾化を感じさせるグループはあるが、筆者が調べた範囲に限っていえば、彼らはインターネット、講演会、インターネット礼拝のどれをとっても「キリスト教信者」を対象としており、一般人を対象としているものは存在していなかった。

これは右派的情報を発信する精神世界関係者が、地域社会のみならず広く社会に呼びかけてマルシェや映画上映、自然保護運動などの活動を展開しているのとは真逆の方向にある。もちろん、先に述べたとおり両者が発信する情報は酷似してもその背景は異なっているためそこに差異が生じるのは当然ではある。

しかし、キリスト教愛国主義派の主たる主張はこれまでの福音宣教は方向が間違っており、教勢を拡大するための宣教論を模索した結果が日本を愛することだとしながら、実際には「既存のキリスト教諸教派」や「キリスト教信者」を対象とした内向きの活動をしており、掲げている「宣教」という趣旨と実際の活動の間に矛盾を感じざるを得なかった。

筆者は（伊藤 2023a：41-49）において、宗教が地域社会から期待に答えられなかったことについてのデータを示し、精神世界がコロナ・パンデミック下において躍進していることも論じてきた（伊藤 2021b：269-270）。

2024年2月時点での現地調査からは、今後の社会がさらに精神世界に好

意的な目を向けていくようになるのではないかとすら感じさせるものがある。両者を比較し、社会に受容されるのは精神世界かキリスト教かを問うた時その答えは既に出ているとするのは筆者の早計であろうか。

終 章

1 この現象はシンクロなのか

筆者は冒頭で、今回の精神世界の一部と福音派の一部を中心としたところから発信されている右傾化した情報について、「根底にあるものは違うが表面的に見れば同じものであり、2020年米国大統領選と同じく意図せぬシンクロ現象である」とした。

しかし、もう少し厳密に状況を見ていくと、キリスト教愛国主義派の具体的な活動はその大半がキリスト教界内部に向けての情報発信のみで対外的活動（宣教活動）はほとんどなされていない。

果たしてこれを「シンクロ」といっても良いのであろうか。2020年米国大統領選挙で精神世界とシンクロした情報を発信していた福音派の一部からは現在も、2024年度米国大統領選挙、またこれからの日本、世界情勢、終末に関して一般向けのセミナーが行われており、少なくともそこからキリスト教に入信する信者が存在している¹⁰³⁾。

これに対して「愛国が日本宣教の鍵だ」とするキリスト教愛国主義派は、2023年11月現在、筆者の知る範囲では目立った対外的な宣教活動をしていない。

もちろん、キリスト教愛国主義派はこれから活動を行っていく方策を立てている最中であるのかもしれないのでこれを結論とすることはできない。

しかしキリスト教愛国主義派が、表面上は同じような主張を行っている右派的情報を発信する精神世界の人々が既に活発な対外活動を行っていることに遅れをとっている事実は否定できない。この点から考えるならば、今回両者から発信される酷似した情報は「シンクロ」しているのではなく、むしろキリスト教愛国主義派が「精神世界に追随している」ということす

らできるのではないだろうか。

2 両者の興隆が表すもの

既に第2章・第3章で示したが、精神世界からの右傾化情報の背景には古神道ブームや前期霊性思想の影響があり、キリスト教愛国主義派の台頭の背景には、キリスト教平和主義運動派の中にある左翼的な活動への反動がある。

しかし、これらは唐突に現れたものではない。筆者はここにも、(伊藤 2021b: 21) で示した「好奇心を超えた『カタストロフイー願望』」にその原因を求めるのである。

2024年に次期米国大統領選挙が控えているが、今のところ Q アノン情報のような急進的に社会に影響を与えるような変化をもたらす要素は見かけない。

社会の一部の分野に右派的傾向が見られるようになったのが2000年代後半からだとすれば、2020年に米国大統領選挙という「時代の変革への期待」、「霊的停滞感に対する変化への希求」があった(伊藤 2021b: 20) ゆえにこの右傾化現象を見逃してきただけであったのではないだろうか。

精神世界との接点が多い参政党が躍進した年を考えればその頃から精神世界の中にもともと右傾化した思想を持っていた古神道系や前期霊性思想に近い人々は存在しており、大統領選挙後にそれまで発信してきた情報が目立つようになっただけだと考えることはできないだろうか。

また、2023年時点で福音派を中心としたキリスト教愛国主義派が積極的に情報発信をはじめたように見えるのも、陰謀論を含んだ情報が薄まったがゆえに、ここ2~3年で台頭してきただけに見えるだけなのかもしれない。

両者が「日本国はどうあるべきか」の具体像を持ちながら、自らの意識改革ではなく、他者の精神性や宗教性の変革を強く求めている姿勢は現代日本社会の中では異質なものであろう。

つまり、背景や、シンクロしているように見える理由はそれぞれ違っても、今回取り上げた両者もまた、(伊藤 2021) で示した人々と同じように「それまでの日常から非日常性への変化という刺激」によって「『内奥へと押し込められていた内圧』を吐き出させる」(伊藤 2021b: 22) モジュール化した機能を内包しているという点で、同じスピリチュアリティを共有していると筆者は思料するのである。

繰り返し書いているように、精神世界においても、キリスト教界（主として福音派）においても彼らは特殊なマイノリティな存在である。

しかし、他者の精神性や宗教性に深く踏み込んでくる彼らの主張が、「果たしてこの社会にとってどれ程の影響を持つのか」、「持ち続けられるのか」、については今後も注目していくに値するものであると筆者は考える。

つまり、全体から見ればマイノリティであってもこれらのピリチュアリティを持った人々が目立つようになっていくこと自体が今後の日本社会を考えていくための1つの指標であり、引き続き慎重に調査を続けていく必要があることを記して本論文の結尾としたい。

注

- 1) 関西大学大学院博士課程後期課程修了 博士(文学)、JTJ 宣教神学校 神学部 修了(序章、第1章、第2章、第4章、終章担当)。
- 2) 同志社大学大学院 修士課程修了 神学修士 日本基督教団隠退教師(第3章、終章担当)。
- 3) 日本の福音派キリスト教が教団・教派を超えて宣教のために集まる大規模会議で、今年の大会は2016年の第6回大会から7年ぶりの開催となる。
- 4) 1999年の「国旗国歌法」の可決前に際して、プロテスタント諸教派及びカトリック正義と平和協議会などが法案に対する反対声明をしたことなどから、キリスト教＝左派という見方がなされることは少なくない(塚田 2017: 134-136)。
- 5) 同プログラム案内トラクト (https://salty-japan.net/2023/09/15/nihon-dendo-kaigi_agt-31) 2023年10月18日閲覧。
- 6) わたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わ

- たくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。「日本基督教団 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」から抜粋 (<https://uccj.org/confession>) 2022年10月5日閲覧。
- 7) 現地調査 福音派キリスト教団体宣教会議 兵庫県 (2023年4月10日-4月12日)。なお同調査を含め現地調査及び聞き取りは、一般財団法人スピリチュアリティ・リサーチセンターの定める「学術調査に関するガイドライン及び倫理規定」(<https://drive.google.com/file/d/1d5EBobC1ObzqOnkBdOR4H4ubW6a34KK8/view?usp=sharing>) にもとづく。
 - 8) 彼らを右派精神世界関係者と記すことを考えたが、彼らは必ずしも右派思想から情報発信をしているわけではない。
 - 9) 本論文の本文中では、学術的知見に基づき分析がなされたものを「文献」、エッセイやエミクナ文書及びまとまったインターネット記事などを「ドキュメント」、トラクトや配布物 (レジュメ) などを「資料」と分けて扱っている。
 - 10) 作家 時事問題評論家 政治評論家 (2023年現在)。
 - 11) 社会学者、元京都大学大学院人間・環境学研究科教授 (2011年現在)。
 - 12) 日本全国 パートナiership制度一覧 (<https://minnano-partnership.com/partnership/all>) 2023年10月17日閲覧。
 - 13) 自民党が全国比例区で約2826万票を獲得したとされている (古谷 2022 : 12-13)。
 - 14) 中には日本とフィリピンの良好な関係をクールジャパンが作った、世界中が憧れる日本の文化、など外国人が日本について論じた著書もある (マンリオ・カデロ 2014『だから日本は世界から尊敬される』小学館新書)。
 - 15) 実際の論調としては韓国というよりも排外主義は「朝鮮民族」そのものに向けられているように感じられる。
 - 16) 作家、放送作家、過去には「探偵ナイトスクープ」等の番組構成を手がけている。
 - 17) 2018年6月28日 (神戸税関による)。その後、没収物の大半は日本政府の方針により生徒に返還されている。
 - 18) 批評家、作家、一般社団法人アジア自由民主連帯協議会副会長 (2023年現在)。
 - 19) War Guilt Information Program の略で、占領軍による日本人の教育プログラムとして実施された。同プログラムの実施については否定されることはないものの、同プログラム内容に関する文献の読み落としや、恣意的な資料の改ざんにより (加茂 2018、能川 2020など)「陰謀論的性格」を持つともされる。
 - 20) 軍人関係者と宗教右派からなり、みずからの組織代表を国会に送り込むなど、極右勢力のなかでも政治色が際立っている組織 (樋口 2020 : 194)。
 - 21) 樋口は、その代表的なものとして日本会議や神道政治連盟をあげている (樋口 2020 : 213)。
 - 22) 麗澤大学客員教授 (2023年現在)。
 - 23) 西岡力「日本会議とともに戦ってきた拉致救出運動」(<https://www.nipponkaigi>).

- org/voice/20years/kakkai) 2023年10月26日閲覧。
- 24) スピリチュアル・カウンセラー、アセンションワークショップスクール主宰。
 - 25) 同 SNS グループは現在303人から構成されている。また、管理者からの名称公開の許可が得られなかったためグループ名は非公開とした。
 - 26) 一般市民を装って潜伏している北朝鮮の工作人員を指す。
 - 27) 2023年10月23日10:28。
 - 28) 2023年10月17日10:32。
 - 29) 2023年9月27日8:43。
 - 30) 2023年8月22日16:07。
 - 31) 2023年10月17日10:56。
 - 32) 2023年5月21日6:49。
 - 33) 「中国人と韓国人の霊格が低い！スピリチュアル」(<https://onlla/AXYAnw4>) 2023年10月27日閲覧。
 - 34) 「スピリチュアルな話しから皆さんに問います」(<https://x.gd/kuDQp>) 2023年10月27日閲覧。
 - 35) 「【スピリチュアル】昔の日本の文化とは」(<https://yuyoshihama.com/spiritual/10-29>) 2023年10月26日閲覧。
 - 36) 「新天皇のスピリチュアルな意味とサイン」(<https://toma.jp/new-emperors-spirituality-means/>) 2023年10月26日閲覧。
 - 37) 「戦争に学ぶ【働き方改革】と慰霊碑から感じたスピリチュアルな体験談」(<https://onlla/H5Uczvh>) 2023年10月28日閲覧。
 - 38) これらの記事はここ数年内に書かれたもので、古いものでも2017年である。
 - 39) 2020年8月8日 聞き取り 禊カフェ参加者(60代男性)兵庫県在住。
 - 40) 2022年3月25日 聞き取り 神戸護国神社マルシェ 主催者(50代女性)兵庫県在住。
 - 41) 2023年11月5日 聞き取り 神戸護国神社マルシェ 出展者(50代男性)大阪府在住。
 - 42) 2023年5月21日 現地調査 KANWADO 滋賀県。
 - 43) 2023年11月12日 現地調査 KANWADO 滋賀県。
 - 44) 名前を変えつつ断続せず続いている類似した傾向の歴史叙述が可能な霊的思想や文化(吉永2010:375-376)のうち、明治維新以降から第二次世界大戦前までを指す(伊藤2022:18)。
 - 45) 目的のために精神世界関係者が協働して活動する組織(伊藤2022:245)。
 - 46) (伊藤2022)で紹介した組織以外にも協働組織やそれに準ずる集まりに接触しており、その過半数が古神道系である(2023年11月18日現在)。
 - 47) 2023年11月24日 現地調査 神話と繋がるサロン 兵庫県。
 - 48) 2023年11月24日 現地調査 神話と繋がるサロン 兵庫県。
 - 49) もちろんここに発言が排外主義もあるとの見方もできよう。しかし、(中国・朝鮮民族は)「元々、日本よりも多彩な霊的な術式をもっていたが、失策を犯してそ

れらを失ってしまった」という話がある背景にあることも考慮しておく必要があるだろう。

- 50) 霊術家・心霊研究家(1872年-1942年)で、田中守平・江間俊一らとともに「霊界の三傑」とされる。療術の研究にも熱心に取り組んでおり、「気」や「プラーナ」などの概念を当時から用いていた。
- 51) 漢字・読み仮名を一部現代仮名遣いに変更。
- 52) 鎮魂婦神法と概要は同じだが、松本道別は「大本教や御嶽教者の低級なる婦神法も亦不可」と、大本の鎮魂婦神法を否定している(松本 1991: 510)。
- 53) 松本と同じく大正 - 昭和初期の霊術家・心霊研究家。
- 54) 漢字・読み仮名を一部現代仮名遣いに変更。
- 55) 偉人奉祀は「地の先祖か家の先祖か人道の標本になる偉人」とされている(松原 2002: 64)
- 56) ロンドンで開催された ISF (国際スピリチュアリスト連盟) の第 3 回大会への参加経歴を持ち、公益財団法人日本心霊科学協会の前身団体を設立した。
- 57) (松本 1991) や (松原 2002ab) も随所で同様の主張をしている。
- 58) 霊性進化論は精神世界の根本思想になっているが、これは戦後ニューエイジが流入してきた結果であり、純粋に前期霊性思想を引き継いでいる心霊主義ではこれを採用していない(公益財団法人日本心霊科学協会など)。
- 59) 「日本を愛するキリスト者の会」(<https://nihonai.web.fc2.com>) 2023年10月26日閲覧。
- 60) 「ソルティー日本キリスト教オピニオンサイト」(<https://salty-japan.net>) 2023年10月26日閲覧。
- 61) この資料についての引用は著作権法第32条及び著者の資料の引用ガイドラインに従って引用した。以下(後藤資料 2023: 項)と記す。
- 62) 副題「はじめに」。以降副題が変わった場合にのみ註にて示す。
- 63) 副題「人種差別の世界」。
- 64) 副題「日本社会とその文化」。
- 65) 副題「世界史の転換点」。
- 66) 副題「日米戦争敗戦と戦後」。
- 67) 「村山談話」(https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/07/dmu_0815.html) 2023年10月25日閲覧。
- 68) 副題「ルーズベルトの戦争」
- 69) 副題「21世紀宣教」。
- 70) 日本国民に占めるキリスト教徒数が1%を切っているということ。
- 71) 副題「日本人の知識」。
- 72) 「『日本民族性悪説と戦うことが日本宣教の鍵』——日本人キリスト者は日本民族を徹底的に愛すべき——SALTY 主筆 西岡力」(<https://www.youtube.com/watch?v=pMEed0WZgy4>) 2023年10月25日閲覧。
- 73) 副題「21世紀日本宣教」。

- 74) 同志社大学名誉教授。歴史神学。
- 75) このような危機感があったということは、本章執筆者が1982年から牧師を隠退した2022年までの40年間を過ごして来た体験からも感じ取ることができた。
- 76) 日本基督教団牧師 北海教区岩見沢教会 牧師 (2023年現在)。
- 77) 2010-2018年、本章執筆者が日本基督教団北海教区、宣教部平和部門委員会で佐藤と同席し、何度も議論した内容による。
- 78) 日本キリスト改革派教会説教免許 日本キリスト教会正教師 日本基督教団正教師 ブリストル大学大学院修了 神学修士。
- 79) 旧約聖書出エジプト記20章3節「あなたは、わたしをおいてほかに神があつてはならない」。改革派は聖書のみを聖典としているがゆえに、この戒めに忠実である。
- 80) 「宣教方針・方策」から抜粋 (<http://qsyu.tank.jp/info.html>) 2023年10月5日閲覧。
- 81) 「日本基督教団京都教区宣教基本方針・方策」から抜粋 (<http://www.uccj-kyoto.com/info2.html>) 2023年10月25日閲覧。
- 82) 「神奈川教区形成基本方針」から抜粋 (<http://www.uccj-kanagawa-homepage-project.org/img/file.pdf>) 2023年10月25日閲覧。
- 83) 「正義と平和協議会の活動」 (<https://www.jccjp.org/our-work>) 2023年10月28日閲覧。
- 84) 「正義と平和協議会の活動」 (<https://www.jccjp.org/our-work>) 2023年10月28日閲覧。
- 85) 『『政教分離』憲法原則の徹底を求める声明』より抜粋 (<https://www.jccjp.org/archives/info/402.html>) 2023年10月28日閲覧。
- 86) 同女性は禊カフェの神社掃除に何度か参加している。
- 87) 護国神社は戦闘員か否かにかかわらず、日本のために働いた戦没者を祀っていた100以上の招魂社を、1939年内務省が整理し道府県に護国神社を設立し、現在道府県52カ所が指定されている (山中 そやま 2021: 15-16)。
- 88) 2023年3月25日 参与調査。
- 89) 山中浩市 そやま 2021 『まんが 護国神社へ行こう!』 (かざひの文庫)。
- 90) 2023年11月1日 現地調査 兵庫県。
- 91) 2023年7月16日 現地調査 (参与調査)。
- 92) 2023年7月21日 現地調査 大阪府。
- 93) 「設立趣意」から抜粋 (<https://nihonai.web.fc2.com/information.html>) 2023年10月9日閲覧。
- 94) 「総会／講演会 (過去)」 (<https://nihonai.web.fc2.com/report.html>) 2023年10月9日閲覧。
- 95) 「皇国史観と日ユ同祖論? まだまだ序の口」 (<http://voiceofwind.jugem.jp/?eid=690>) 2023年11月10日閲覧。
- 96) 同団体のWEB ページ、講演会、出版物には「日ユ同祖論」が広く展開されている。
- 97) 「神道を撰取する宣教?」 (https://www.logos-ministries.org/kiyotae/kiyo2/11_10)

- 27.html) 2023年11月10日閲覧。
- 98) 「日本民族性悪説と戦うことが日本宣教の鍵」2023年5月1日 (<https://salty-japan.net/2023/05/01/nihonsenkyo-no-kagi/>) 2023年11月10日閲覧。
- 99) クライストコミュニティ顧問牧師 (2023年現在)。
- 100) 「教会形成とリーダーシップ」2023年5月15日 (https://salty-japan.net/2023/05/15/ohashi-hideo_2023-0411/#more-8580) 2023年11月10日閲覧。
- 101) 同オンライン・チャーチの Facebook より引用 (<https://www.facebook.com/profile.php?id=100080304347999>) 2023年11月10日閲覧。
- 102) 「そこまで繋がるか」(<https://youtu.be/HKeD0PcGqMc?si=6vWISzam9eaOolVG>) 2023年11月10日閲覧。
- 103) (伊藤 2021b) でシンクロ情報を発信していた牧師の Facebook には「聖書預言セミナーバイブルカフェの働きで、仲間に助けられ、福音宣教の機会が開かれ、次々洗礼希望者が与えられ、充実した1年でもありました。」のような記事が複数掲載されている (2023年10月16日 22:48投稿記事) 2023年11月11日閲覧。

参考文献

- 浅野和二郎 1938 『心霊學より日本神道を観る』(心霊科學研究會出版部)
- 雨宮純 2023 「神真都 Q と陰謀論団体とコンスピリチュアリティ」横山茂雄 竹下節子 清義明 堀江宗正 栗田英彦 辻隆太郎 雨宮純 2023 『コンスピリチュアリティ入門 スピリチュアルな人は陰謀論を信じやすいか』(創元社)
- 伊藤耕一郎 2021a 「パンデミックと靈性」『宗教研究』94巻別冊 (日本宗教学会)
- 伊藤耕一郎 2021b 「精神世界と日本の福音派——米国大統領選挙の視座から」『千里山文學』創刊号 (関西大学大学院文学研究科)
- 伊藤耕一郎 2022 『スピリチュアルのリアル 精神世界再考』(SRC パブリッシング)
- 伊藤耕一郎 2023a 「自肅という関頭にあつて——『京都ハリストス正教会と地域社会』を事例に宗教儀礼の自肅を問い直す」『ちさとやま 関頭』(関西大学大学院文院協出版部)
- 伊藤耕一郎 2023b 「日本の右傾化と精神世界——陰謀論を接点として——」『心霊科学 研究発表大会 第20回発表論文抄録』(公益財団法人 日本心霊科学協会)
- 井上卓弥 2015 『満州難民 38度線に阻まれた命』(幻冬舎)
- 江原啓之 2007 『日本のオーラ 天国からの視点』(新潮社)
- 大谷栄一編 2021 『戦後日本の宗教者平和運動』(ナカニシヤ出版)
- 佐藤幹雄 2011 『靖国問題 北海道の40年』(靖国神社国営化阻止北海道キリスト教連絡会)
- マンリオ・カデロ 2014 『だから日本は世界から尊敬される』(小学館新書)
- 加茂道子 2018 『ウォー・ギルト・プログラム GHQ 情報教育政策の実像』(法政大学出版局)
- 久保有政 主筆 2018 「神社のご利益とイスラエルの神」『月刊レムナント』No. 285 (レムナント出版)

- 久保有政 主筆 2021年「聖書という視点を持つと人生もビジネスも国も、すべてが豊かになる」『月刊レムナント』N0319（レムナント出版）
- 蔵持明 2022『参政党の研究』Kindle（日章新聞社）
- 小熊英二 2020『『右傾化』ではなく『左が欠けた分極化』』小熊英二 樋口直人 編『日本は「右傾化」したのか』（慶應義塾大学出版会）
- 後藤牧人 2023「21世紀日本宣教（仮題）」同年4月 宣教会議 配付資料。
- 島菌進 2007『精神世界のゆくえ 宗教・近代・スピリチュアリティ』（秋山書店）
- 清義明 2023「宗教と陰謀のプリコラージュ」横山茂雄 竹下節子 清義明 堀江宗正 栗田英彦 辻隆太郎 雨宮純 2023『コンスピリチュアリティ入門 スピリチュアルな人は陰謀論を信じやすいか』（創元社）
- 砂原庸介 秦正樹 西村翼「地方議会における右傾化——政党間競争と政党組織の観点から」小熊英二 樋口直人 編『日本は「右傾化」したのか』（慶應義塾大学出版会）
- 土肥昭夫 2012『キリスト教と天皇制』（新教出版）
- 中北浩爾・大和田悠太 2020「自民党の右傾化とその論理」小熊英二 樋口直人 編『日本は「右傾化」したのか』（慶應義塾大学出版会）
- 西村幸祐 2017『報道しない自由 なぜ、メディアは平気で嘘をつくのか』（イースト・プレス）
- ベリー・西村 2014『天皇奠都と日本純血人の使命 - シュメール文明と縄文の秘密』（東京ブックス）
- 靖国神社国営化阻止北海道キリスト教連絡会 2011「靖国問題 北海道の40年」（北海道キリスト教連絡会）
- 松谷好明 2018『キリスト者への問い』（一麦出版社）
- 樋口直人 2020「政治主導の右傾化」小熊英二 樋口直人 編『日本は「右傾化」したのか』（慶應義塾大学出版会）
- 古谷衡 2023『シニア右翼 日本の中高年はなぜ右傾化するのか』（中公新書ラクレ）
- 松谷満 2020「世論は『右傾化』したのか」小熊英二 樋口直人 編『日本は「右傾化」したのか』（慶應義塾大学出版会）
- 松本道別 1991『霊學講座』（八幡書店）
- 松原咬月 2002『神伝霊学奥義』（八幡書店）
- 三日月はづき 2022『ご先祖様にまつわるスピリチュアルな話：メッセージ、お墓参り、生き方、スピリチュアルサイン、武士のご先祖様、不思議な話』Kindle（Kindleストア）
- 宮家邦彦 2014『日本の敵 よみがえる民俗主義に備えよ』（文春新書）
- 早川タダノリ『『日本スゴイ』という国民の物語』塚田穂高編 2017『徹底検証 日本の右傾化』（筑摩書房）
- 百田尚樹 2019『偽善者たちへ』（新潮新書）
- 保江邦夫 2017『願いをかなる『縄文ゲート』の開き方』（ビオ・マガジン）
- 保江邦夫 2019『祈りが護る國 アラヒトガミの霊力をふたたび』（明窓出版）
- 吉永進一 2010「近代日本における神智学思想の歴史」『宗教研究84巻2 葺』（日本宗教

学会)

山中浩市 そやままい 2021 『まんが 護国神社へ行こう!』(かざひの文庫)

参照 WEB ページ

同プログラム案内トラクト (https://salty-japan.net/2023/09/15/nihon-dendo-kaigi_agt-31) 2023年10月18日閲覧。

「日本基督教団 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(<https://uccj.org/confession>) 2022年10月5日閲覧。

「学術調査に関するガイドライン及び倫理規定」(<https://drive.google.com/file/d/1d5EBobC1Obzq0nkBdOR4H4ubW6a34KK8/view?usp=sharing>)

「学術調査に関するガイドライン及び倫理規定」(<https://onl.bz/Xx6WriQ>)

日本全国 パートナーシップ制度一覧 (<https://minnano-partnership.com/partnership/all>) 2023年10月17日閲覧。

「日本会議とともに戦ってきた拉致救出運動」(<https://www.nipponkaigi.org/voice/20years/kakkai>) 2023年10月26日閲覧。

「中国人と韓国人の霊格が低い!スピリチュアル」(<https://onl.la/AXYAnw4>) 2023年10月27日閲覧。

「スピリチュアルな話しから皆さんに問います」(<https://x.gd/kuDQp>) 2023年10月27日閲覧。

「【スピリチュアル】昔の日本の文化とは」(<https://yuyoshihama.com/spiritual/10-29>) 2023年10月26日閲覧。

「新天皇のスピリチュアルな意味とサイン」(<https://toma.jp/new-emperors-spirituality-means/>) 2023年10月26日閲覧。

「戦争に学ぶ【働き方改革】と慰霊碑から感じたスピリチュアルな体験談」(<https://onl.la/H5Uczvh>) 2023年10月28日閲覧。

「日本を愛するキリスト者の会」(<https://nihonai.web.fc2.com>) 2023年10月26日閲覧。

「ソルティー日本キリスト教オピニオンサイト」(<https://salty-japan.net>) 2023年10月26日閲覧。

「村山談話」(https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/07/dmu_0815.html) 2023年10月25日閲覧。

「『日本民族性悪説と戦うことが日本宣教の鍵』——日本人キリスト者は日本民族を徹底的に愛すべき——SALTY 主筆 西岡力」(<https://www.youtube.com/watch?v=pMEed0WZgy4>) 2023年10月25日閲覧。

「宣教方針・方策」(<http://qsyu.tank.jp/info.html>) 2023年10月5日閲覧。

「日本基督教団京都教区宣教基本方針・方策」(<http://www.uccj-kyoto.com/info2.html>) 2023年10月25日閲覧。

「神奈川教区形成基本方針」(<http://www.uccj-kanagawa-homepage-project.org/img/file.pdf>) 2023年10月25日閲覧。

「正義と平和協議会の活動」(<https://www.jccjp.org/our-work>) 2023年10月28日閲覧。

- 「正義と平和協議会の活動」(<https://www.jccjp.org/our-work>) 2023年10月28日閲覧。
- 『『政教分離』憲法原則の徹底を求める声明』(<https://www.jccjp.org/archives/info/402.html>) 2023年10月28日閲覧。
- 「設立趣意」(<https://nihonai.web.fc2.com/information.html>) 2023年10月9日閲覧。
- 「総会／講演会(過去)」(<https://nihonai.web.fc2.com/report.html>) 2023年10月9日閲覧。
- 「皇国史観と日ユ同祖論? まだまだ序の口」(<http://voiceofwind.jugem.jp/?eid=690>) 2023年11月10日閲覧。
- 「神道を摂取する宣教?」(https://www.logos-ministries.org/kiyotae/kiyo2/11_1027.html) 2023年11月10日閲覧。
- 「日本民族性悪説と戦うことが日本宣教の鍵」2023年5月1日 (<https://salty-japan.net/2023/05/01/nihonsenkyo-no-kagi/>) 2023年11月10日閲覧。
- 「教会形成とリーダーシップ」2023年5月15日 (https://salty-japan.net/2023/05/15/ohashi-hideo_2023-0411/#more-8580) 2023年11月10日閲覧。
- 同オンライン・チャーチの Facebook (<https://www.facebook.com/profile.php?id=100080304347999>) 2023年11月10日閲覧。
- 「そこまで繋がるか」(<https://youtu.be/HKeD0PcGqMc?si=6vWISzam9eaOolVG>) 2023年11月10日閲覧。